

夏目漱石『行人』研究
一郎を中心に

博士前期課程二年 劉軍

目次

序章

⋮
1

第一章 『行人』の背景

⋮
3

第一節 時代背景

⋮
3

第二節 執筆事情

⋮
4

第二章 一郎の苦悩

⋮
9

第一節 外部から見られる一郎の苦悩

⋮
9

一、一郎の家族関係

⋮
9

二、三角関係

⋮
14

第二節 内面から見られる一郎の苦悩

⋮
19

第三章 一郎の行方

⋮
33

終章

⋮
35

注

⋮
37

参考文献目録

⋮
40

30字
×
40行

一九一二（明治四十五・大正元）年、漱石は二つの小説を朝日新聞に連載した。一つは一月一日から四月二十九日まで、四カ月をかけて完成した『彼岸過迄』である。もう一つは、それから七カ月の十二月六日、前作『彼岸過迄』に試みられた短篇連鎖の手法を継承した『行人』である。しかし、大正二年四月七日で『行人』は作者漱石の病気による「友達」「兄」「帰つてから」まで進み中断、その後五カ月余り経って九月十六日から十一月十五日まで「塵労」五十二回が書き継がれた。

『行人』と『彼岸過迄』は同じ年に連載したが、時代は明治から大正へ変った。「明治のなくなつたのは御同様何だか心細く候」（大元・8・8、森次太郎宛書簡）によつて、漱石が大正という新しい時代を意識しながら『行人』を書き出したことは間違いない。

『行人』に関する論究は数え切れないほどあったが、多くの研究者が一所懸命研究し、あらゆる方面を考察する。これらの『行人』論を分類すると、主に、一、「夫婦間の深刻な危機」二、「一郎の悲劇」を介しての「現代文明批判の先駆性」三、「嫂と弟二郎の微妙なロマンス」四、中断をはさむ前後の「主題や構想」をめぐる問題五、語り手としての二郎像の五点が挙げられる。（注1）

漱石の作品の中では、男女関係を描くものは珍しくない。『行人』においてもこれらの描写が最も大きく占めている。それゆえに『行人』論の比較的初期には、一郎と直との夫婦問題に探ろうとするものが多く、宮本百合子氏の「両性相剋悲劇」（注2）、小宮豊隆氏の「夫婦関係を前景に押し出し、それを主題として全編を構成してゐる」（注3）、瀬沼茂樹氏の「普通の静かな夫婦関係の根柢にある男女両性の冷たい相剋が主題としてとりあげられる」（注4）といった指摘である。とはいえ、上記のような男女関係を考察するのは既に過去のものとは言えない、現在でもこのような夫婦問題を考察する研究者は少なくない。次いで、一郎を主人公として着目し、その思想上の苦悩を考察するものは度々論じられた。江藤淳氏の「『行人』に於て最も支配的なのは『我執』の主題の追求」（注5）、梶木剛氏の「（他者）にかかわる（自己本位）の行方を追尋すること」（注6）、樋野憲子氏の「一郎とお直という一組の夫婦を通じて『人から人へ掛け渡す橋』を模索」（注7）といったものはこの範疇に属する。

これらの後、橋本佳氏が二郎と直の両者を重視し、「それを無視することは、作品としての『行人』を正當に理解したことにはならないおそれがある」（注8）と指摘した。伊豆利彦氏がこれを受け継いで、「二郎のお直に対する秘められた心がこの作品の主題となつていゝ」（注9）と立論した。この伊豆利彦氏の論、いわゆる「二郎説話」

が今日賛否いずれの側に立っても無視できないと思われる。

伊豆氏への反論として、重松泰雄氏は、「二郎説話」と「一郎説話」との総合の上に『行人』の主題を探ろうとした。(注10) また、竹腰幸夫氏は『行人』には、一郎の苦悩を中心とした問題と、二郎の立場に関する問題の二つが交錯して、主題が形成されている(注11)、宮井一郎氏は「持って生れた男性の我儘と嫉妬」「男性の間の性の争ひ」に「作品の主題」を見る(注12) など主題を論じるものは指摘されている。同一の作品を論じるので、このように様々なものが主題を指摘したのはなぜか。無論それは、採用する方法やアプローチの角度の相違によるものであると思われる。

『行人』の中絶は漱石の病気による出来事であるが、作者の病気という体験による心境が変化し、構想が変ることも考えられる。伊豆利彦氏はこれを『行人』全体の「裂け目」(注13)と指摘した。しかし重松泰雄氏は『行人』には伊豆の指摘する「裂け目」は見られないと批判した(注14)。更に、二人は語り手の二郎と嫂の直の間に愛があるかどうかという点で対立している。

私は本研究で先行研究を踏まえて、これらの問題点に注目し、更に時代背景を意識しながら主人公の一郎の苦悩を新たに考察していると思う。

第一章 『行人』の背景

第一節 時代背景

『行人』を発表した一九一二年は明治から大正へ変更する年であり、漱石は大正という新しい時代に十分意識的であったことは序章で既に言及した。

この作品は、長野家の次男、二郎を語り手として過去を回想した物語である。「今」という時間を表す言葉は二郎の語り頻出し、読者にインパクトを与える。ここで、まず「今」を使った個所を見ることにする。

- ① 自分は此時の自分の心理状態を解剖して、今から顧みると、兄に調戲ふといふ程でもないが、多少彼を焦らす氣味でゐたのは慥である。と自白せざるを得ない。（「兄」四十二）
- ② 自分は今になつて、取り返す事も償ふ事も出来ない此態度を深く懺悔したいと思ふ。（同）
- ③ 今考へると兄には、猶更の苦痛であつたに違ない。（同）
- ④ 今の自分は此純粹な一本調子に対して、相応の尊敬を払ふ見地を具へてゐる積である。（同四十三）
- ⑤ 自分は此詩に似たやうな眠りが、馱夫の呼ぶ名古屋々々と云声で、急に破られたのを今でも記憶してゐる。（「帰つてから」一）
- ⑥ 此眠方が自分には今でも不審の一つになつてゐる。（同二）
- ⑦ 自分は今でも雨に叩かれたやうなお重の仏頂面を覚えてゐる。（同九）
- ⑧ 其折自分は何を話してゐたか今慥に覚えてゐない。（同二十一）
- ⑨ けれども今自白すると腹の中は話の調子で示される程穩かなものでは決してなかつた。（「塵勞」二）

「今」の時点は重要な役割があると考えられる。時代背景は『行人』の作品世界を説明するには一つのポイントであることは否定できないだろう。新聞連載小説を読む人々にとって、「今」は、大正という新しい時代のことを指している。それでは、二郎が回想する物語はいつの出来事であるのか。

『行人』は二郎が大阪梅田の停車場に降り立つところから語り始める。その日は「夕方の比較的長く続く夏の日」（「友達」四）であった。そして、作品の結尾は、一郎がHさんと旅行に出かける翌年の夏休みの間であった。すなわち、夏から翌年の夏までのほぼ一年間は『行人』の物語の期間である。この一年間は特定できないもの、ある程度の範囲は絞られる。

「塵勞」八では、二郎と父が上野の表慶館へ出かけることが描かれていゝ。この表慶館は明治四十二年五月十日から開館された(『東京朝日新聞』明42・5・12に「表慶館は十日午前十時より開館し」)。二郎と父が表慶館へ行く事も当然その後のことである。「兄」十六では、一郎と二郎が乗る和歌の浦のエレベーターが出て来たが、此れは漱石自身の明治四十四年八月十四日講演旅行の際立ち寄った。荒正人氏の『漱石研究年表』(注15)によれば、それは「大正初年に取払われ」た。以上の二点から、二郎は大正の「今」になって、明治四十何年の出来事を語っているという事情が明らかになった。漱石は、明治終焉の物語を新しい時代の読者に語っている。

『行人』の「長野家」は「古い歴史を有った家」(「帰つてから」二十九)と二郎が呼んでいる。この明治期の家族制度は明治末から崩壊されつつである。河田嗣郎の論文「家族制度ノ崩壊カ社会生活ニ及ホス影響」の中で下記のような一節がある。

我国ノ現状ハ云ハハ之レ過渡期ニ在リトモ云フヲ得可ク、国民ノ大部分ニハ尚ホ未タ大家族制度ノ保存セラレタルモノ多キニ拘ラス、都市ニ出テテ独立ノ生計ヲ立ツル壮年者其他一般ニ所謂教育アル階級ニ在リテハ己ニ甚タ広ク小家族制度ノ行ハレツツアルヲ見ルナリ。(注16)

大阪に出て独立の生計を立てている岡田の家は、既に広く行われつつある小家族制度の典型的な家である。

橋川文三氏の次のような指摘がある。

大正期は一般的について明治期的な家の権威が弛緩し、くずれ始めた時代とみられる。(中略)この時代における家はもはや家長的権威を失い、庇護者であることとともに威圧者であることをも放棄しつつあった。少なくとも、かなり急速に都市化がすすみ、早くも大衆化現象をさえあらわしつつあった大都市での家は、いわゆる『文化住宅』に象徴されるように、小市民的消費単位としての『小さいながらも楽しい』ホームへと変貌しつつあった。(注17)

「長野家」は、存在基盤が見て来たような「過渡期の日本」の中で崩壊の危機に瀕している。

第二節 執筆事情

『行人』の執筆時期の日記や断片などが残されていないので、その間の執筆事情はよく分からないが、前作『彼岸過迄』は同時期に創作され、『行人』と共に漱石の後期三部作と言われ、この小説の執筆事情は『行人』の執筆事情を解明するに参考になると思う。『彼岸過迄』冒頭の「彼岸過迄に就て」において漱石はこう書い

ている。

事実を読者の前の告白すると、去年の八月頃既に自分の小説を紙上に連載すべき筈だったのである。(中略)其二箇月が去つた十月にも筆を執らず、十一十二もつい紙上へは杳たる有様で暮して仕舞つた。(中略)

歳の改まる元旦から愈書始める緒口を開くやうに事が極つた時は、長い間抑へられたものが伸びる時の樂よりは、背中に背負された義務を片附る時機が来たといふ意味で先何よりも嬉しかつた。(中略)

「彼岸過迄」といふのは元日から始めて、彼岸過迄書く豫定だから、単にさう名づけた迄に過ぎない(中略)。かねてから自分是个々の短編を重ねた末に、其の個々の短編が相合して一長篇を構成するやうに仕組んだら、新聞小説として存外面白く読まれはしないだらうかといふ意見を持してゐた。(中略)此の「彼岸過迄」をかねての思はく通りに作り上げたいと考へてゐる。けれども小説は建築家の図面と違つて、いくら下手でも活動と發展を含まない譯に行かないので、たとひ自分が作るとは云ひながら、自分の計画通りに進行しかねる場合が能く起つて来るのは、普通の實世間に於て吾々の企てが意外の障害を受けて予期の如くに纏まらないの一般である。

『彼岸過迄』の執筆は予定より四ヶ月程遅れて開始され、終了もまた、開始時に見積もつた時間より一ヶ月以上延期されていることが分る。小説の手法は「かねてより持していた」と言つた漱石は何故順調に進まなかつたか。執筆開始約二週間前の日記に「何もする事が出来ぬ位小説の趣向其他が氣にかかる也」と記され、それによると、漱石は『彼岸過迄』を書くにあたって、内容より手法、主題に苦慮したことが分かる。そして、時期には、漱石が「彼岸過迄書く予定」だったが、連載の日程から見れば、『彼岸過迄』の当初の終了予定は「雨の降る日」あたりであつたと言える。作品の延期と同時、それまでの三篇の作品世界と非常に異なる須永市蔵の物語を書き始めるのである。書くことが同時に探求することである作家漱石の姿が現れているとも言えるだろう。即ち、執筆開始時に明確でない作品主題が、書き進められるに従つて、漸く一つの方向に向い動き始めた。

これまで『彼岸過迄』について論述して来たが、次に『行人』の執筆に関して考へて行くつもりである。『行人』では、『彼岸過迄』に見られた主題展開があるかどうかの事が肝心である。

まずここで用いたのは、大正元年十二月一日付の中村菘宛の書簡である。

實は昨三十日夜漸く一回認め社へむけ發送致置候氣も乗らず

自信もなく如何にも書きにくく侯其が百回以上になるかと思ふと少々恐ろしく侯小生の考では創作は天下の根氣仕事の一なるべくと存侯（注18）

『行人』は『彼岸過迄』と同じように、執筆当初から相当てこずっていることが分る。『行人』は、漱石の予定では、「友達」、「兄」「帰つてから」の三篇で完成することは次の大正二年二月二十六日山本松之助宛書簡から言える。

拝啓其後は失禮申上侯偕小生小説「帰つてから」と申す分済み次第あとの掲載せねばならず侯。然るに先般小生方へ二つの作を見てくれと頼み来侯（注19）

また、同年三月十六日、中勘助宛書簡。
君の小説は小生の次に掲載する事に相成侯（中略）小生の小説は今月一杯位つゞくやも知れず大兄の予告かねてより御作り置き被下度五六行にて結構に候（注20）

漱石は、「帰つてから」をもって『行人』を完成させる意図があったと考えられる。自分の作品の掲載後の作品を考えたが、胃潰瘍による出血で『行人』は予定通りにいかなかった。次に引用するのは、大正二年四月二日付山本松之助への書簡である。

拝啓まだ原稿を書く頭がふらふらし。立つと足がふらふらし。胸も時々痛みますが。今日ためしに一回かきました。是があとずつとつゞくとよう御座いますがあとが危険ですからあなたの方の都合の出来るまで少し溜めて置いて出す譯には参りますまいか。（注21）

翌日、また同人宛で手紙を書き送らなければならぬ状態に陥る。
啓上今日も一回書き候間御送申候此分にては終局までつゞけて書け可申無御遠慮御連載願侯（同）

こうして作品『行人』は、結末を与えられないまま中絶された。大正二年四月七日、朝日新聞に「お断り」の広告が載る。

本篇は非常の好評を博し既に完結に近づきたる際漱石氏病気の為め擱筆するの已むを得ざるに至り本日を以て打切となし他日単行本として刊行の砌是を完成せしむる事となしたり幸ひに諒せられよ（注22）

広告には「完結に近づきたる」というが、実際完結した「塵労」は、『行人』を構成する四篇のうち最長の五十二節が書き上げた。中絶による、『行人』における構成や主題の分裂があることは多くの評論家によって指摘されている。確かに中絶をもって作品が分裂の様相を呈することは否定できないが、「塵労」の作品世界の核心にあるものの「Hさんの手紙」を説明することによって、「塵労」は新たに生じたものではなく、中断前の三篇の作品世界を底流し続けていた

ものであることが分る。この点については後述することにする。『行人』に描かれた一郎の異様は、まさに漱石の第三回目の「神経衰弱」の病期の中にあるが故に、作家漱石自身の精神状態の投影を見る事が出来る。

漱石の生涯には三度強度の神経衰弱があったことは定説である。最初は松山落ちを結果した明治二十六・七年で、次いでイギリスから帰国直後の明治三十六・七年、そして『行人』の執筆時期を含む大正元年から三年までが三度目である。しかし、漱石の妻鏡子は初回の精神衰弱を目にしていなかったから、大正期のは二回目の発病と思つて、次のように述懐している。

暮れから妙に顔が火照つててかかしてあるので変だ変だと思つておりますと、またも例の頭がひどくなつて参りました。ちようどこの前にいちばんひどかつた時から十年めにあたります。(中略)

それでもちゃんちゃんと小説は書いておりましたが、しまいには胃と両方を悪くしたので、一時執筆を中止いたしました。それは「行人」でしたが、こんな頭で書いたものか、この小説はぜひぶん疑り深い変な目で見るところが書いてあるかとおもわれます。(傍点原文)(注23)

言うまでもなく、「ずいぶん疑り深い変な目で見るところ」は一郎の妻直への猜疑心を指している。『行人』の総体が神経衰弱期特有の心理を反映していると考えられる。しかし残念ながら、この期に限つて、漱石自身の手になる日記や断片などは全く残されていない為、これを検証することが不可能である。ところが、『行人』擱筆の翌年、大正三年には異様な内容をもつ断片が残されている。『行人』執筆時期に少々遅れるが、漱石の精神衰弱時の特性を考察するには貴重な資料である。漱石の精神衰弱時の特性を考察する為には、単に大正三年の断片ではなく、前回明治三十六・七年時のものも持ち入り、これらの特性は、一回のものではなく、精神衰弱時の共通な特性であることを判明したい。

大正三年の「日記及断片」には、次のような一節がある。
ある晩八時か九時頃心地よく寝た処例の音で眼をさましてそれなり寝つかずにゐると、妻が小さな声で彼女の弟にどうしても調戲へない。死なないと事が極つた以上……と云つてゐた。

(注24)

このような精神衰弱下の幻聴に基づく、異常な猜疑心で妻が自分の死を待つという被害妄想の中に陥る。上記のような被害妄想と幻聴は、大正期の精神衰弱時の現象であるのみならず、十年ほど前の精神衰弱時にも見られる。岩波版全集の「明治三十七・八年頃」の断片から見れば分る。下記はこの断片に記載されたものである。

我輩の向ふの家に〇〇といふ書生の合宿所がある此書生等は日常我輩の疍癩を起して大声を發するのを謹聴するの榮を得る果報者である時として先生の仮声杯を使つて我輩を驚かしめる其処に女の召使か何かゞ居つて此書生と二人仮声を使ふ其標本を一寸諸君に御紹介する。(注25)

漱石のこの自分が被害者である意識は何らかの形で鏡子に関連し、よつて反転攻勢として女中を追放することもした。例の大正三年の断片で、「彼等の一人も決して普通の家の下女としては通用せぬものである。代へれば必ず妙な奴をよこす。(中略)妻のいふ所によると碌な家庭でないから碌な女が居つかないのださうだ。」(注26)と記載している。鏡子はこれを「一人を廊下から下へ突き落とし、一人が門のところは出たのを追うて、門前の路の上で人が見てるところでポカポカなぐつたそうです。」(注27)と証明した。この点についてもまた明治三十六・七年の精神衰弱時にも見られ、「何が癩にさわるのか女中を追い出してしまします。私にはいよいよつらく当たります。」(注28)との鏡子の回想がある。漱石の女中を追放する行為は鏡子を「つらく当たり」の為の反撃だと言える。

漱石の精神衰弱時自分を被害者と意識し、妻鏡子への反撃は女中を追い出すにとどまらず、家計を自分で管理することもした。大正三年の断片で、「十二月から会計を自分がやる事にする。」(注29)との記載から明らかになる。これについて前回もあつたことは鏡子の下の推測から考証することができる。

それからお金なんぞ一文もくれず、お小遣いももとよりくれません。日用品は用いて取つて月末にこれだけかかつたと勘定をみせれば、まさかそれを払うのはいやだとは申さないのだからいいのですが、手もとに小遣いをおいてくれないのには弱りました。みんな私を困らせるためだったのでしよう。(注30)

ここまでの分析には漱石の自分が被害者である妄想によつて、妻鏡子を「つらく当たり」、「困らせる」ことを明らかにしたが、漱石の妻への反感はそればかりでなく、離縁の願望があるまでに鏡子を嫌つた。『漱石の思い出』の二十一章は「離縁の手紙」と題されてい

る。これは明治三十六・七年の回想である。漱石の離縁の意志は口頭ばかりではなく、岳父中根重一に手紙を書き送るまでにした。精神衰弱が再發した大正期も同様に離縁の意志が強かつた。これに関しては、鏡子は下記のように記録している。

こうなつてくると、いつもの式で、またも別れ話です。しかし今おまえに出て行けといつても行く家もないだろうから別居をしろ、お前が別居するのがいやなら、おれのほうから出て行くところですよ。(注31)

漱石の被害妄想から發した妻への嫌悪は一郎と直の夫婦關係に影

響を与えると思われるだろう。次は一郎の苦悩を外部と内面に分れて考察していく。

第二章 一郎の苦悩

第一節 外部から見られる一郎の苦悩

『行人』の前三篇「友達」、「兄」、「帰つてから」は一郎の第二郎を語り手として回想体の物語、主な話は長野家をめぐって広げているのである。長野家の長男一郎は真実を求めたいが、家族、特に妻お直との心的な交わせる事が出来なかつたので、家族と切り離され、孤独の地獄に陥ってしまったのである。一郎の苦悩を考察する為に、まず、一郎の家族関係を見る事にする。

一、一郎の家族関係

・一郎と妻子

一郎と妻直は「既に過去何年かの間に、夫婦といふ社会的大切な経験を彼等なりに嘗めてきた、古い夫婦であつた。さうして彼等の嘗めた経験は、人生の歴史の一部分として、彼等に取つては再びしがたい貴いものであつたかも知れない。けれども何方から云つても、蜜に似た甘いものではなかつたらしい。」（「帰つてから」三十六）二人は日常生活の中でよく「食い違つた」（「兄」三）し、兄の「少し

の具合で事が面倒になる例も稀ではなかった。」(同)周りの人、特に一郎の母を困らせる。兄に同情的な母は一郎が素気ないと分かつて、直のほうにばかり罪を着せた。一郎の弟二郎は直に対して、「彼女は決して温かい女ではなかった。けれども相手から熱をあたへると、温め得る女であつた。持つて生れた天然の愛嬌のない代りには、此方の手加減で随分愛嬌を絞り出す事の出来る女であつた。」(同十四)と評価した。二郎は直にとつて唯一理解し合っている家族だつた。一郎はこの二人の親密関係を疑い、二郎に「直は御前に惚れてるんぢやないか」(同十八)と言ひ出した。おごり高ぶっている一郎は自分が「一時の勝利者にさへなれない。永久には無論敗北者だ」(「帰つてから」二十八)と思つていた。このような一郎は、妻である直に対して、自身から近づいて行くことが出来なかつた。一郎が直に冷ややかでなければ、直も又、夫に心を開こうと、歩み寄せる姿勢を示す。

漱石は『行人』でぎこちない夫婦関係を描いている。

一郎夫婦の間には、芳江という一人子がいる。母直の「気性を受けて生まれた」(同三)「頑是ない」(同)彼女はよく直に馴付いていた。芳江が自分の母にあれ程に馴付いても、人情の常だが、自分の父である一郎に対して極端な態度を取るのは何に原因があるのだろうか。一郎自身に無論原因があるが、直にも何らかの責任があると思ふ。

「帰つてから」では、次のような描写がある。

この眸の黒い髪の沢山ある、さうして母の血を受けて人並よりも蒼白い頬をした小女は、馴れ易からざる彼女の母の後を、奇蹟の如く追つて歩いた。それを嫂は日本一の誇として、宅中の誰彼に見せびらかした。ことに己の夫に対しては見せびらかすといふ意味を通り越して、寧ろ残酷な敵打をする風にも取れた。兄は思索に遠ざかる事の出来ない読者家として、大抵は書齋裡の人であつたので、いくら腹のうちで此小女を鍾愛しても、鍾愛の報酬たる親しみの程度は甚だ希薄なものであつた。感情的兄がそれを物足らず思ふのも無理はなかつた、食卓の上などで夫が色に出る時さへ兄の性質としては偶にはあつた。(同)

一郎は直と子供を争う力がないと言つても良いのではないだろうか。一郎はこのような劣勢にあつても自ら積極的な態度を取らず、「黙つて独り書齋へ退く」(同)のである。

一郎は自分のたりない所における明があるのか。次の話から考えてみる。「己は自分の子供を綾成す事が出来ないばかりぢやない。それ所か肝心の我が妻さへ何うしたら綾成せるか未だに分別が付かないんだ。此年になる迄学問をした御蔭で、そんな技巧は覚えひまがなかつた。二郎、ある技巧は、人生を幸福にする為に、何

うしても必要と見えるね」(同五)と一郎が言っている。言うまでもなく、一郎は自分が人を綾成す技巧を持っていない、幸福になれないということが分かっている。これは学問をしたせいというのはい一郎の口実だった。また、一郎は自分が「講義を作るため許生まれた人間ぢやない。然し講義を作ったり書物を読んだりする必要があるために肝心の人間らしい心持を人間らしく満足させる事ができなくなつてしまつたのだ。」(同)と言ひ、「周囲を呪ふやう」(同)になつていく。

一郎は自分の未来についてこのように話した。「人間と合はないので、已むを得ず自然の方に心を移す」(同六)一郎はますます人間と切り離され、孤独の「我」の世界に陥つていく。

・一郎と両親

お貞さんの結婚見合いという「例の事件」の為、「母」が一郎と直を連れて、大阪へ出かけた。貞の結婚を決られた後、一郎は「是もお父さんの御蔭さ」(「兄」五)と言ひながら、「唇に薄い皮肉の影が動いた」。(同)「母は気がつかなかつた。」また、「全くお父さんの御蔭に違ないよ。岡田が今あ遣つてるのと同じ事さ」(同)と母は自慢している。「憐れな母は父が今でも社会的に普通の勢力を有つてゐると許り信じてゐた。兄は兄丈に、社会から退隠したと同様の今の父に、其半分の影響さへ六づかしと云ふ事を見破つてゐた。」(同)

一郎は自分の両親をばかにしていると思われる。自分の父親は「一種妙におつちよこちよいの所がある」(傍点原文)「帰つてから」(十一)と思つている一郎は、勿論何があつても両親と相談する事ができない。

「公の務を退いた」(同十一)父が、草花を栽培しながら、家の中で隠居している。

「父が昔堅氣で、長男に最上の権力を塗り付けるやうにして育て上げた結果である。母も偶には自分をさん付にして二郎さんと呼んで呉れる事もあるが、是は単に兄の一郎さんのお余りに過ぎない」(「兄」二)二人の息子がいるが、両親は長男の一郎を大事にしていた。『行人』では、今の長野家の戸主について明瞭に書いてないが、父は一郎に家督を譲つたと判断できる。なぜなら、嫂の言葉に傷付いたお重が訴へに来て、「嫂には一言も聞糺さずに、翌日お重を連れて三越へ出掛けた。」(「帰つてから」一〇)り、二郎が下宿する事について何も意見を言わず、ただ下宿した二郎を実家に連れて行く氣遣いをする。親としては、二郎を見守りたいが、一郎を遠慮して、まだ結婚していない二郎を仕方なく下宿させた。

本来なら母は二郎と嫂一緒に和歌の浦行に反対したが、一郎と話した後、すぐ賛成に変わった。この行為は自分の子供を信頼している

事でもないし、事に安心できる事でもない。ただ一郎の「気性を能く呑み込んであるから」。(「兄」六)「母は長い間吾子の我を助け育てるやうにした結果として、今では何事によらず其我の前に跪く運命を甘んじなければならぬ位地にあつた。」(同)肉親にも付き合いたいという事は一郎にとつても、両親にとつても悲惨だと思われる。

現状では、母は一郎を「大事にする丈あつて、無論彼を心から愛してゐた。けれども長男といふ訳か、又氣六づかしいといふ所為が、何処かに遠慮があるらしかつた。一寸の事を注意するにしても、成る可く氣に障らないやうに、始めから氣を置いて掛つた。」(同七)一方、二郎に対しては、「丸で子供同様の待遇」(同)をしてゐる。

このように育てられた一郎は他者への対し方では「我」の角を折らずに、「我」と折り合える人を求めた。妻である直に対して、一郎のあり方は直の自由を奪い、直に不信を植えつける徴候がかいま見られるだろう。

両親の「尋常の父母以上にわが子を愛して来た」(「塵勞」十二)自信が、彼等の不幸を一層濃く染めつけた。

両親ことに母親は「兄の機嫌買を子供のうちから知り抜いている」(同)といつても、「兄の存在を苦にしているらしく見えて、甚だ痛々しかつた。」(同)現状に陥ってしまった。本来の考えは、二郎と直の関係が曖昧だったから、一郎がよく機嫌悪そうに見せた。現実では、二郎が「下宿する前後から今日迄少しの晴間なく続いたのである。そうして夫が段々陰悪の一方に向つて真直に進んで行くのである。」(同)母は「本当に困つちまうよ」、「腹も立つが氣の毒でもある」(同)と二郎に訴えた。更に、「平生から兄に対する嫂の仕打に飽き足らない顔を見せていた母でさえ、此時は彼女について終に一口も訴えがましい言葉を洩らさなかつた。」(同)

・一郎と弟妹

一郎は次の「家長」となる「長男」であり、弟二郎との関係は「権力」を行使する者とされる者の関係であり、そして行使する側もされる側もそれを「例のこと」として受止め、受入れているのである。これについては、二郎がここ語っている。

自分と兄とは常に此位懸隔のある言葉で対応するのが例になつてゐた。是は年が少し違ふのと、父が昔堅氣で、長男に最上の権力を塗り付けるやうにして育て上げた結果である。母も偶には自分をさん付にして二郎さんと呼んで呉れる事もあるが、是は単に兄の一郎さんのお余りに過ぎないと自分は信じてゐた。

(「兄」二二)

西垣勤氏は一郎、二郎の関係について、「この兄弟は対等では全く

ない。(中略)この兄弟の上下、圧迫関係は注意する必要がある」(注32)と述べたが、たしかにこの兄弟間には序列がはっきりしている。日常生活の中で、二郎は一郎に対して「さうですね」「何です」(「兄十二」といった、合いの手的な返答をしている。三沢と精神病の娘についての一郎の解釈については、二郎は「只大人しく聞いてゐた」(同)二郎は一郎に対して意見の提示も反論も許さないのである。これらはいくまで二郎の判断に過ぎないとも言われようが、次のような場面は二人の関係を如実に反映する。

直を巡つての会話である。一郎は直との関係について悩んだあげく「本当の所を何うぞ聞かして呉れ」(同十八)と二郎に言い出したにもかかわらず、二郎が「兄さん、此事に就いては僕も實はどうやら考へてゐたんです」(同二十一)と意見を述べようとした途端、「いや御前の考へなんか聞かうと思つてゐやしない」(同)と二郎を止めてしまう。

一郎は家の中では専横を極めているが、「他人の前へ出ると」「円満な好同伴」(同六)となる。それに対して、二郎は「無暗に腹」(同)を立て、「一々其人の宅迄出掛けて行つて、彼等の誤解を訂正して遣りたいやうな氣さへ起」(同)こるのであった。二郎は一郎に対する不満や怒りを持っている。

一郎は二郎をさんざん口数で圧迫するだけでなく、暴力行為もあつたと二郎が語っているのである。二郎は以前一郎と「将棋を指した時、自分が何か一口云つたのを癩に、いきなり将棋の駒を自分の額へ打付けた」(同九)という騒ぎがあつたのである。しかもこのような暴力行動は珍しくないと思われる。次の二つのエピソードから証明できる。一つは和歌山行きの際、二郎の思いである。

自分は唯俯向てゐた。何時もの兄ならもう疾に手を出してゐる時分であつた。自分は俯向きながら、今に兄の拳が帽子の上へ飛んで来るか、又は彼の平手が頬のあたりでピシヤリと鳴るかと思つて、凝つと癩癩玉の破裂するのを期待してゐた。(同二十四)

もう一つは和歌山から帰つた時の二郎の思いである。

自分は其時場合によれば、兄から拳骨を食ふか、又は後から熱罵を浴せ掛けられる事と予期してゐた。(同四十四)

以前から二郎は兄一郎を「尊敬しつつも、何処か馬鹿にし易い所のある男の様に考へない訳に」(同十九)行かない。和歌山から帰つた後、「嫂に新たな同情が加はつた」(同四十四)二郎は、一郎を「軽蔑し始めたのである」(同)

親密であるべき兄弟関係は「家」の制度の下で、苦しい立場におかれてしまい、無論お互いに理解する事は無理である。「三角関係」が兄弟関係を断絶する事の導火線となつた。二郎は兄に外へ出る決

心を打ち明けるのを苦に感じ、一郎も弟の下宿へ一度も立ち寄りな
いのである。

一郎は一人の妹お重がいる。お重は「大兄さんの妹ですもの」と
いう理由で一郎に極めて同情を持って、「嫂を嫌ってゐた」(「帰つて
から」十)のである。だが、『行人』では、この唯一の妹と接触する
事に関する描写は多くないのである。お重は大兄一郎を心から尊敬
していると言えるか、答えは否である。

二郎と喧嘩する時、二郎の言葉「ぢやお前も早く兄さん見た様な
学者を探して嫁に行つたら好からう」(同九)に対して、「掴み懸り
かねまじき凄じい勢ひを示し」(同)、泣き出したのである。自分の
「結婚がお貞さんより遅れた」(同)のが原因の一つであるが、一郎
は良い夫に成れないと思つているのも考えられない事はないだろう
か。この推測は言い過ぎると思われるが、二郎の下宿へ訪ねたお重
についての場面から明確に示した。

左右かと思ふと却つてお重の方から突然「大兄さんも随分変
人ね。あたし今になつて全く貴方が喧嘩して出たのも無理はな
いと思ふわ」などと云つた。お重から藪から棒に斯う驚かされ
ると、自分は腹の底で自分の味方が一人殖えたやうな気がして
嬉しかつた。(同三十七)

お重もまた二郎と同じく一郎と気まづくなつた。

一郎はお重を実験対象させ、「テレパシー」という実験をした。お
重はそれを「そんなものに罹るのはコレラに罹るより厭だ」(「塵勞」
十一)と二郎に告げた。一郎のこの行動に対した、お重は理解でき
ないものの、「氣味が悪いわね、いくら学問だつてそんな事しちゃ」
(同)と批判してしまつたのである。

一郎は「段々生物から孤立して、書物の中に引き摺り込まれて行
く」(「帰つてから」三十七)。元々一郎は性質がひねくれていたので、
なかなか家族とうまく行かないが、弟二郎と妻直との関係を疑つて、
より気難しくなる。次は一郎が疑っている二郎と直の関係を考察し
て行きたい。

二、三角関係

「今の日本の社会は」「皆な上滑りの御上手もの丈が存在し得るや
うに出来上がつてゐる」(「帰つてから」二十一)と考へている一郎
は、自分の父も母も「偽の器」であり、「細君は特にさう見える」(「塵
勞」三十七)と思いつつ、真実を追求し、家族と切り離され、孤独
の地獄に陥つてしまうのである。それでは、一郎の苦悩の焦点と思
われる二郎とお直の「自然が醸した恋愛」(「帰つてから」二十七)
について考察していこうと思う。

二郎は下宿へ訪ねたお直に彼女の家族に「彼方でも別にお変りはありませんか」「塵勞」三」と挨拶したので、直は一郎と結婚する前に二郎と知り合いであり、二郎に「大きなクツション」「兄」三十三）をプレゼントしていたのである。長野家の嫁になって、一家の一人一人に出来るだけの事を「為て上げてる」（同三十一）のを自分の務めと思つて「忍耐」して来た直に対して、母の觀察は、「一体直は愛嬌のある質ぢやないが、御父さんや妾には何時だつて同じ調子だ」（同十四）であるが、二郎は「元来性急な性分で、よく大きな声を出したり、怒鳴り付けたりするが、不思議にまだ嫂と喧嘩をした例はなかつたのみならず、場合によると、兄よりも却つて心置なく話をした」（同）。お直は二郎にだけ親しく接するのは家族特に夫一郎の誤解を招く原因である。

一郎は「冷淡過ぎる」妻直が弟二郎に「惚れてるんぢやないか」（同十八）と思ひ込み、「おれが靈も魂も所謂スピリットも掴まない女と結婚してゐる事丈は確だ」（同二十一）と嘆く。そして、この事を口に出して、家族や親友の共感を呼んだのである。

二郎が一郎の直と一緒に「和歌山へ行つて一晩泊つて呉れ」（同二十四）という依頼を受け取つて、和歌山へ出掛けようとする朝、真相を知らない母は「和歌山は已めにお為よ」（同二十六）と制止し、二郎の躊躇した態度を見た後、更に不安を見せながら、「御前と直と行くのは不可ないよ」「兄さんに悪い許ぢやないが……」（同）と繰り返して制止している。もしここで母は人情の常から弟と兄嫁の嫌疑を避けるの為しか思われれば、後の何回もあつた場面が母の疑いをさせたのであると思う。

四人は東京へ帰る直前の事である。

自分が繩を十文字に掛け始めると、嫂はすぐ立つて兄の居る室の方に行つた。自分は思はず其後姿を見送つた。

「二郎兄さんの機嫌は何うだつたい」と母がわざわざ小さな声で自分に聞いた。

「別に是と云ふ事ありません。なあに心配なさる事があるもんですか。大丈夫です」と自分は特更に荒つぽく云つて、右足で行李の蓋をぎいぎい締めた。

「實はお前にも話したい事があるんだが。東京へでも帰つたら何れ又緩くりね」（同四十四）

母は嫂の「後姿を見送つた」二郎を見て、声を出して二郎の目線をお直から引き戻らせ、一郎の弟であるという事を注意した。二郎のそわそわした様子も母に強く印象を与えたに違いない。東京へ帰りの列車の中で、母は寝ているふりをしながら、二郎とお直の行動を観察していたのである。二郎がお直の為に「上から飛び下りて又窓を閉て換へてやつた」（「帰つてから」一）のを見た母は締まつて

いる窓をわざと二郎に「妾の足の方も締めて御呉れ」（同）頼んだ。母は目の前の三人の關係にずいぶん頭を悩ましていたのである。家に帰った後、二郎が一郎夫婦關係を邪魔していると認められた母は、しばしば二郎に結婚する事を勧めた。

「二郎、御前が居なくなると、宅は淋しい上にも淋しくなるが、早く好い御嫁さんでも貰つて別に成る工面を御為よ」（帰つてから）（二十）

二郎は「母の言葉の裏に、自分さへ新しい家庭を作つて独立すれば、兄の機嫌が少しは能くなるだらうといふ意味が明らかさまに読まれた」（同）。二郎はここから家を出る事を考え始めたのである。その後、二郎は「宅に居るのが愈厭になつた」（同二十三）し、三沢の所へ相談に行くのである。三沢は二郎に「君がお直さん杯の傍に長く喰付いてゐるから悪いんだ」（同）と答えた。やはり、親友である三沢も二郎が一郎夫婦關係を妨げていると思つていたのである。二郎は三沢に説明する氣も弁明する氣も起らず、自分が外へ出る事を決心した。翌日、二郎は自分の決心を母に打ち明け、母は「出るならお嫁でも極つてから」（同二十四）と残念を思いながら、「二郎たとひ、お前が家を出たつてね：」（同）とまた結婚問題を話し掛けようとしたのである。

二郎の妹お重ははつきりした立場でこう言つてゐる。

「ぢや兄さんも早くお嫁を貰つて独立したら好いでせう。其方が妾が結婚するより幾ら親孝行になるか知れやしない。厭に嫂さんの肩ばかり持つて：」（同八）

世渡りの経験が浅いお重さえ二郎が一郎夫婦關係を妨げていると思つてゐる。

しかし、これらは他人の思いに過ぎないし、うわべだけの現象である。私に思う。なぜなら、理由は二つあるからである。一つは、一郎夫婦の關係は二郎が「宅を出た後も唯好くない一方に進んで行く」（「塵勞」四）という事實である。もう一つは二郎とお直の距離は物語の展開につれて遠くなつて行き、二郎が段々お直を分らなくなるという事實である。次は二郎がお直に対した觀察である。

① 自分の見た彼女は決して温かい女ではなかつた。けれども相手から熱を与へると、温め得る女であつた。持つて生れた天然の愛嬌のない代りには、此方の手加減で随分愛嬌を搾り出す事ので出来る女であつた。（「兄」十四）

② 自分は平生こそ嫂の性質を幾分かしつかり手に握つてゐる積であつたが、いざ本式に彼女の口から本當の所を聞いて見ようとすると、丸で八幡の藪知らずへ這入つた様に、凡てが解らなくなつた。（同三十九）

③ 自分は此の間に一人の嫂を色々に視た。―彼女は男子さへ超越

する事の出来ないあるものを嫁に來た其日から既に超越してゐた。或は彼女には始めから超越すべき垣も壁もなかつた。始めから囚はれない自由な女であつた。彼女の今迄の行動は何物にも拘泥しない天真の発現に過ぎなかつた。(同)

④ 或時は又彼女が凡べてを胸のうちに畳み込んで、容易に己を露出しない所謂しつかりものの如く自分の眼に映じた。さうした意味から見ると、彼女は有り触れたしつかりものの域を遙に通り越してゐた。あの落付、あの品位、あの寡黙、誰が評しても彼女はしつかりし過ぎたものに違ひなかつた。驚くべく凶々しいものでもあつた。(同)

⑤ 或利那には彼女は忍耐の権化の如く、自分の前に立つた。さうして其忍耐には苦痛の痕跡さへ認められない氣高さが潜んでゐた。彼女は眉をひそめる代りに微笑した。泣き伏す代りに端然と坐つた。恰も其坐つてゐる席の下からわが足の腐れるのを待つかの如くに。要するに彼女の忍耐は、忍耐といふ意味を通り越して、殆んど彼女の自然に近い或物であつた。(「塵勞」六)

二郎はお直を元から理解しているが、直が「長野家の長男の嫁」になると共に二人の距離が遠くなる一方である。二郎にとつて結婚する前の直は一人の若い女性であるが、結婚した後の直はも女性と見えず自分の家族の一員である。「和歌山の告白」では、直もまた「腑抜」「近頃は魂の抜殻になつ」(「兄」三十)たと言ひ、更に自分は「満足です」と付加えている。無論、直の「満足」は通常の意味での満足ではない、現状に忍耐する決心である。これは言わば当たり前のこととして、その時代の嫁の受身の教育されて來た事柄であるが、これが意識された「忍耐」になる時、女性の一つの大きな不幸を背負わされることになる。『行人』は二郎とお直の關係を暗示しつつ、お直の苦悩、二郎の当惑を描くことによつてむしろそれを打ち消す方向にあると言える。

ここまでの考察で「二郎と直の自然が醸した愛」を否定するのは不十分であると思われるが、次は一人だけの場面について考察する。二郎と直二人だけの場面は二箇所である。一つは、和歌山の宿であり、もう一つは、直が二郎の下宿への突然の訪問である。

二郎はお直を連れて和歌山へ出掛け、天候のせい、一泊を余儀なくされた。二人は昔の「クツション」を想起し、お直は二郎に今迄口へ出していなかった死にいた考えを二郎に告白したのであつた。宅中の電灯が消えた後の真暗の中で、二人はこのような話をした。

「居るんですか」

「居るわ貴方。人間ですもの。嘘だと思ふなら此処へ來て手で障つて御覽なさい」

自分は手探りに探り寄つて見たい氣がした。けれども夫程の度胸がなかつた。其うち彼女の坐つてゐる見当で女帯の擦れる音がした。

「姉さん何かしてゐるんですか」と聞いた。

「先刻下女が浴衣を持つて来たから、着換へようと思つて、今帯を解いてゐる所です」と嫂が答へた。(同三十五)

お直の言動はいかにも大胆過ぎると思われるが、本義は二郎との性的関係を求めることではなく、夫との抗争上、自分の味方に引き入ようとしているに過ぎない。何故そう考えたのか。

夫の策謀を察知した直は、二郎と和歌山へ出かける事に胸中がさっぱりしている。もし、二郎と性的関係を発生したら、一郎の疑いが事実になつてしまうのである。この結果は直の希望と反対の方向であり、一郎の被害妄想が事実になつてしまう恐れがあるので、直は二郎と性的関係を持つ事は考えられない。

翌日、二人が無事に帰つた。後の二郎は直の予定通り、直の陣営に立ち、一郎と離れていくのである。

二人だけのもう一つの場面は二郎の下宿である。二郎はお直が「下宿へ訪ねて来ようとは其時迄決して予期していなかった」(「塵勞」二)のであり、「空想にすら描いていなかった」のであつた。そして、二郎は「その驚きは喜びの驚きよりも寧ろ不安の驚きであつた」。(同)

二郎の「大變御無沙汰をしていますますが、彼方でも別にお変りはありませんか」(同三)の口調から、二郎には、一郎とお直が結婚する以前、お直の実家の人々とそれなりの交際があつたことは明らかである。また、二郎とお直はお直の結婚以前から知り合ひだつたことも肯定できる。第三者がいない所、このような関係を持つ二人は二郎の話を契機にして、お直の結婚以前の二人の楽しい思い出へと話が進んで行くが、お直はかえつて「ええ有り難う、別に……」(同)とだけ云つて実家に纏わるこの話を回避した。「御無沙汰つて云えば、貴方番町へも随分御無沙汰ね」(同)とお直が二郎に問い掛けた。二郎が番町の実家から遠ざかつてゐることは事実であつた。二郎は何故実家と遠ざかつてのか。

これまでの経過から一郎の眼や他の家族の眼を二郎は意識せざるを得なくなつたのであり、意識することは二人である歡喜よりも懊惱へと繋がつて行くことになつた。つまり、二郎は実家でお直と偶然に向き合つても、心的なる交情は中々交わせなくなつてしまつた。無意識的な交わせる喜びよりも意識することから来る苦しきの方が、より多く感じられるようになってしまつたのである。したがつて、二郎とお直は前に進むことが不可能である。

一郎は暗い眼で直を見つめ、直の本心を探しあぐねていらだつ。

そして努力が報いられなかつたばかりか、夫から冷たく突き放された直は、努力して身にまとった張子の中の空洞をのぞいて「腑抜」を自覚することになるのである。そしてかかる周囲の同情のなさは所以は、直がよき嫁として言動を抑えてきたからでもあつて、彼女は自らの賢さによつていつその不幸を引き受けていると言つてよいのである。一郎の中に潜在する母親を始めとする肉親への不満は、直への不満に転位されて、自らの孤独を深め、同時に直をいつそう深い孤立の淵に突きやることになるのである。

ここまでの分析から、「三角関係」を否定する事が出来ると思う。一郎の苦悩は別の原因があると考えられる。

第二節 内面から見られる一郎の苦悩

三沢は二郎が一郎と直の夫婦関係を妨げていると思つている。三沢は次のように言う。

君兄さんを旅行させるの、快活にするのつて心配するより、自分で早く結婚した方が好かないか。其方がつまり君の得だぜ。

(同十六)

勿論これは三沢の判断であるが、やはり以前からのHさんとの話し合いの結果でもある。三沢は自分なりに長野兄弟のことを真剣に問題にして、二郎の結婚の候補者を探し、その女を誘い出して、雅楽所で二郎に見せた。しかし、二郎とその女が将来い一緒になることは決してない。二郎とその女が本当に結婚すると仮定しても、おそらく一郎の苦悩はなくなるまいだろう。なぜなら、Hさんの手紙から一郎の内面的な苦悩が存在していることが分るからだ。根本の原因を取り除かないと一郎の苦悩を完全に取り除くことにはならない。

二郎は自分が家から出て問題が解決されてない結果に対して、「父や母と相談の揚句、兄に旅行でも勧めて見る事にした。」(同十二)。「家族皆が理解できない一郎を、外部の人、一郎と一番親密なHさんに頼んで、一緒に旅行へ出かけることになった。Hさんが一郎の内面的な苦悩を解明し、一郎を救済する媒介者になることは「長野家」の願いと考えられるだろう。

Hさんとは、一郎と学生時代からの親友であり大学の同僚でもあり、其の上二郎の友達三沢は「在学中Hさんを保証人にしていた。学校を出てからも殆んど家族の一人の如く始終其処へ出入していた。」(同) Hさんと三沢が、共通の話題として適当な長野兄弟に就いて、話し合ったことが何度もあつたのではないだろうか。特に、それは二郎が下宿についてしたり、一郎が大学の講義中に「異様」がでつたことについて話した。Hさんは一郎と旅行へ出る前、一郎、

二郎と直の「三角関係」を一定程度知っていった。

二郎は「旅行が兄のために有利であると認めたら、Hさんを煩わして、是丈の手続を運んだのであるが、真底を自白すると、自分の最も苦に病んでいるのは、兄の自分に対する思わくであつた。」(同二十一) 二郎が最も悩み苦しんだのは、嫂とよりも寧ろ兄との関係の方であるだろう。不安極まりない二郎は、一郎とHさんの旅行へ出ることが決つた後、Hさんに「兄と一緒に旅行される間、兄の挙動なり言語なり、思想なり感情なりに就いて、貴方の御観察になつた所を出来るだけ詳しく書いて報知して頂く訳には行きますまいか。」(同二十三)と頼んだ。

Hさんの手紙は一郎の苦悩を解明する事に重要な役割があると思う。次は、Hさんの手紙を詳しく見て行くことにする。

沼津の宿で「旅行中に誰でも経験する一種の徒然に襲われ」(同三十)たHさんは、昔学生の頃一郎とよく打つた碁をしようとい一郎に勧めたが、一郎は「まあ止さう」(同)と二度も云つて断つたのである。とうとうHさんは一人で碁を打ち始めた。一郎は、少しの間それを見ていたが、「不意に座を立つて廊下へ出」(同)て行つたのである。だがすぐ戻つて来て、「突然「遣らう」といふや否や」(同三十一) Hさんの手から「碁石を挽ぎ取るやうに引つ手繰り」(同)、すぐ打ち始めた。ところで、一郎は「手早く運んで行く碁面を、仕舞迄辛抱して眺めてゐるのが苦痛だと云つて、とうとう途中で已めて終」(同)つたのである。「床に入る前」に、Hさんは一郎から其時の心理状態の説明をされた。

兄さんは碁を打つのは固より、何をするのも厭だつたのださうです。同時に、何かしなくつては居られなかつたのださうです。此矛盾が既に兄さんには苦痛なのでした。兄さんは碁を打ち出せば、屹度碁なんぞ打つてゐられないといふ氣分に襲はれると予知してゐたのです。けれども又打たずには居られなくなつたのです。それで已むを得ず盤に向つたのです。盤に向ふや否や自烈たくなつたのです。仕舞には盤面に散点する黒と白が、自分の頭を悩ます為に、わざと続いたり離れたり、切れたり合つたりして見せる、怪物のやうに思はれたのださうです。兄さんはもう些とで、盤面を滅茶々に掻き乱して、此魔物を追払ふ所だつたと云ひました。何事も知らなかつた私は、少し驚き乍らも悪い事をしたと思ひました。

「いや碁に限つた訳ぢやない」と云つて兄さんは、自分の過失を許して呉れました。私は其時兄さんから、兄さんの平生を聞きました。兄さんの態度は碁を途中で已めた時ですら落付いてゐました。上部から見ると何の異状もない兄さんの心持は、恐らくあなた方には理解されてゐないかも知れません。少なくとも

も斯ういふ私には一つの発見でした。

兄さんは書物を読んでも、理屈を考へても、飯を食つても、散歩をしても、二六時中何をしても、其処に安住する事が出来ないのださうです。何をして、こんな事をしてはゐられないといふ氣分に追ひ掛けられるのださうです。

「自分のしてゐる事が、自分の目的になつてゐない程苦しい事はない」と兄さんは云ひます。

「目的でなくつても方便になれば好いちやないか」と私が云ひます。

「それは結構である。ある目的があればこそ、方便が定められるのだから」と兄さんが答へます。

兄さんの苦しむのは、兄さんが何を何うしても、それが目的にならない許りでなく、方便にもならないと思ふからです。ただ不安なのです。従つて凝としてゐられないのです。兄さんは落ち付いて寝てゐられないから起きると云ひます。起きると、ただ起きてゐられないから歩くと云ひます。歩くとただ歩いてゐられないから走けると云ひます。既に走け出した以上、何所迄行つても止まれないと云ひます。止れない許なら好いが一刻と速力を増して行かなければならないと云ひます。其極端を想像すると恐ろしいと云ひます。冷汗が出るやうに恐ろしいと云ひます。恐くて恐くて堪らないと云ひます。(同)

引用は長くなつてしまつたが、この引用から一郎の乱れた心は明らかになつた。一郎は現在強い程度で行き詰り絶望したりしているのである。

Hさんは、一郎が云うような不安は「人間全体の不安」(同三十二)で、一郎「一人さう恐ろしがる必要がない」(同)と一郎に言つたのである。すると、一郎は「眼から出る軽侮の一瞥」(同)をしたのである。一郎はまた「人間の不安は科学の発展から来る。進んで止まる事を知らない科学は、かつて我々に止まる事を許して呉れた事がない。徒歩から俵、俵から馬車、馬車から汽車、汽車から自動車、それから航空船、それから飛行機と、何所迄行つても休ませて呉れない。何所迄行かれて行かれるか分からない。實に恐ろしい」(同)と言つたのである。一郎のこの話の意味はつまり、一人の人間の生には時間的にも空間的にも限りがあるのに、人間全体の問題には限りがなく、次々に出されるものである。本来その宿命として、そうした問題に対し続いた進度に關つた己の知識は問題に届かないんじゃないのような不安から、逃げれる事等出来ないという恐ろしさ。これは敢えて言えば、一郎の幻想による恐ろしさであると考えられる。更に、一郎は、「人間全体の不安を、自分一人に集めて、そのまた不安を、一刻一分の短時間に煮詰めた恐ろしさを経験してゐる」(同)

と述べている。

ここで引用し、『行人』と対比的に考えて行きたいのは、夏目漱石が明治四十四年和歌山において「現代日本の開化」という講演の内容である。これを読むと、いくつかの個所が『行人』と密接に関係しているように強く感じさせられた。例え、紀三井寺の参拝、和歌の浦へ泊り、宿の裏のエレベーターに乗った事、碁を打つ事、電信電話自動車など交通メディアの発展した事等である。この講演の一部の引用である。

役に立つと同時に害を為す事も明かなんだから（中略）、生存競争から生ずる不安や努力に至っては決して昔より楽になつてゐない。（中略）吾々は長い時日のうちに種々様々の工夫を凝し智恵を絞つて漸く今日迄発展して来たやうなもの、生活の吾人の内生に与へる心理的苦痛から論ずれば今も五十年前も又は百年前も、苦しさ加減の程度は別に変わりはない（中略）、是が開化の産んだ一大パラドックスだ（中略）。現代日本の開化は皮相上滑りの開化である（中略）。現代日本が置かれたる特殊の状況に因つて吾々の開化が機械的に変化を余儀なくされる為にただ上皮を滑つて行き、又滑るまいと思つて踏張る為に神経衰弱になる（中略）真と云ふものは、知らない中は知りたいけれども、知つてからは却つてア、知らない方が宜かつたと思ふ事が時々あります、モーパサンの小説に、或男が内縁の妻に厭気がさした所から、置手紙か何かして、妻を置き去りにした儘友人の家へ行つて隠れて居たといふ話があります、すると女の方では大変怒つてとうとう男の所在を捜し当てて怒鳴り込みましたので男は手切金を出して手を切る談判を始めると、女は其の金を床の上に叩きつけて、こんなものが欲しいので来たのではない、若し本当にあなだが私を捨てる気ならば私は死んで仕舞ふと、そこにある（三階か四階の）窓から飛び下りて死んで仕舞ふと言つた、男は平気な顔を装つてどうぞと云はぬ許りに女を窓の方へ誘ふ所作をした、すると女はいきなり馳けて行つて窓から飛び下りた、死にはしなかつたが生れも付かぬ不具になつて仕舞ました、男も是程女の赤心が眼の前へ証拠立てられる以上、普通の軽薄な売女同様の観をなして、女の貞節を今迄疑つてゐたのを後悔したものを見て、再び故の夫婦に立ち帰つて、病妻の看護に身を委ねたといふのがモーパサンの小説の筋ですが、男の疑も好い加減な程度で留めて置けば是程の大事には至らなかつたかも知れないが、さうすれば彼の懷疑は一生徹底的に解ける日は来なかつたでせう、又此所迄押して見れば女の真心が明かになるにはなるが、取り返しの付かない残酷な結果に陥つた後から回顧して見れば、矢張り真底懸価のない真相は分らなく

でも好いから、女を片輪にさせずに置きたかつたでありませう、日本の現代開化の真相も此話と同様で、分らないうちこそ研究もして見たいが、斯う露骨に其性質が分つて見ると却つて分らない昔の方が幸福であるといふ気にもなりません、兎に角私の解剖した事が本当の所だとすれば我々は日本の将来といふものに就てどうしても悲観したくなるのであります(注33)

漱石のこの講演と『行人』の構造は同工異曲の妙を得ているとは言えないこともない。漱石は『行人』で考えた日本近代化における問題有新的時代の聞き手に説くのである。本研究にやや離れる恐れがあるように思われるが、次に前の続きとしてHさんの手紙から一郎の苦悩を考察して行くのである。

一郎の不安を聞きつつ黙って煙草を吹かしていたHさんが、何とかして一郎をその苦悩から救い出して上げたいと念じる。凡て其他の事を忘れた瞬間を気付いた一郎はHさんに「君の方が僕より偉い」(同三十二)と言ったのである。「心は宿なしの乞食見たやう」、「二六時中不安に追い懸けられ」、「情ない程落付け」ず、「世の中で自工程修養の出来てゐない氣の毒な人間はあるまい」(同三十三)等と思つた一郎は、「電車の中やなかで、不図眼を上げて向ふ側を見ると、如何にも苦のなささうな顔」「邪念の萌さないぼかんとした顔」(同)に出食わす事があり、そんな時一郎は、「しみじみ嬉しいといふ刺戟を総身に受け」、「殆んど宗教心に近い敬虔の念をもつて、其顔の前に跪いて感謝の意を表したくなる」(同)ということのである。ここまで分析して来た一郎のHさんに対し「偉い」という感じとあの顔に「感謝の意を表したくなる」という感情は同じ物の非利己的思想への敬意を表したのである。この事で一郎はお貞さんに特別な感情をもっていると思われている。次はお貞に対する一郎の言語を考察して行く。

Hさんの報告によると、旅へ出た後、一郎は弟二郎について「名前さえ口にされません」(同三十七)し、妹お重の事に就いても「何にも云われません」(同)だったのである。しかし、お貞に就いて何箇所も語り、高い評価をしていたのである。ここはこれらの個所を集めて考へて行くのである。

Hさんが二郎に手紙を出す二日前の晩、一郎と鎌倉の浜で散歩する時一郎とこのような話をした。

私がお貞さんからお貞さんといふ人の話を聞いたのは其時の事でした。お貞さんは近頃大阪の方へ御嫁に行つたんださうですから、兄さんは其宵に出逢つた幾組かの若い男や女から、お貞さんの花嫁姿を連想でもしたのでせう。

兄さんはお貞さんは宅中で一番慾の寡い善良な人間だと云ふのです。ああ云ふのが幸福に生れて来た人間だと云つて羨まし

がるのです。自分もああなりたいと云ふのです。お貞さんを知らない私は、何とも評しやうがありませんから、只さうかさうかと答へて置きました。すると兄さんが「お貞さんは君を女にしたやうなものだ」と云つて砂の上へ立ち留りました。(同四十九)

H さんは一郎のお貞さんの話が続くかと思つたが、一郎は話題を転換したのだ。次の朝、一郎とHさんはまたお貞さんの事を話した。

朝食事をした時、飯櫃を置いた位置の都合から、私が兄さんの茶碗を受けとつて、一膳目の御飯をよそつてやりますと、兄さんは又お貞さんの名を私の耳に訴へました。お貞さんがまだ嫁に行かないうちは、丁度今私がしたやうに、始終兄さんのお給仕をしたものださうですね。昨夜は性格の点からお貞さんに比較され、今朝は又お給仕の具合で同じお貞さんにたとへられた私は、つい兄さんに向つて質問を掛けて見る氣になりました。「君は其お貞さんとかいふ人と、斯うして一所に住んでゐたら幸福になれると思ふのか」

兄さんは黙つて箸を口へ持つて行きました。私は兄さんの態度から推して、大方返事をするのが厭なんだらうと考へたので、それぎり後を推しませんでした。すると兄さんの答が、御飯を二口三口呑み下したあとで、不意に出て来ました。

「僕はお貞さんが幸福に生れた人だと云つた。けれども僕がお貞さんのために幸福になれるとは云やしない」(同五十一)

H さんは一郎が「暗い奥には矛盾が既に漂つて」(同) いると感じたのである。このような感じは我々読者も強く感じされる。一郎は續いてこう語つたのである。

「君は結婚前の女と、結婚後の女と同じ女だと思つてゐるのか」(中略)

「嫁に行く前のお貞さんと、嫁に行つたあとのお貞さんとは丸で違つてゐる。今のお貞さんはもう夫の為にスポイルされて仕舞つてゐる」

「一体何んな人の所へ嫁に行つたのかね」と私が途中で聞きました。

「何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪になるのだ。さういふ僕が既に僕の妻を何の位悪くしたか分らない。自分が悪くした妻から、幸福を求めるのは押が強過ぎるぢやないか。幸福は嫁に行つて天真を損はれた女からは要求出来るものぢやないよ。」(同五十一)

これはほぼ『行人』という物語の最後の場面と言える所だろう。一郎は自分が「被害妄想」から生じた被害者であるのを思いつつ、自分が加害者でもあることを反省されたのである。結局、一郎は自

分が何を求めたか問題のままにしてしまったのである。

『行人』の前三篇は「他人を知らない」を語っているとすれば、最後の篇「塵勞」はそれを更に掘り下げて、「自分さえ知らない」事を語っている。

Hさんの手紙を振り返って見ると、何箇所が注意しなければならぬと思われる。次はこれらについて考察して行くのである。

前の論述では、Hさんが他者の為を思い他者の為に行動できる彼の区別、他者と自己の区別は殆んど意味をなさなくなっている瞬間に一郎は「君の方が僕より偉い」(同三十二)と言っているが、一方、Hさんの言動に対し「誠を装う偽りに過ぎない」(同三十六)と反するようなことを云うのである。これは二人が修善寺へ行った後、山登りの下りる時の事である。

兄さんが突然後から私の肩をつかんで、「君の心と僕の心とは一体何処迄通じてゐて、何処から離れてゐるのだらう」と聞いたのは。

(中略)

「Keine Brücke führt von Mensch zu Mensch (人から人へ掛け渡す橋はない)」

私はつい覚えてゐた獨乙の諺を返事に使ひました。無論半分は問題を面倒にしない故意の作略も交つてゐたでせうが。すると兄さんは、「さうだらう、今の君はさうより外に答へられまい」と云ふのです。私はすぐ「何故」と云つて聞き返しました。

「自分に誠實でないものは、決して他人に誠實であり得ない」私は兄さんの此言葉を、自分の何処へ応用して好いか氣が付きませんでした。

「君は僕のお守になつて、わざわざ一所に旅行してゐるんぢやないか。僕は君の好意を感謝する。けれども左右いふ動機から出る君の言動は、誠を装ふ偽りに過ぎないと思ふ。朋友としての僕は君から離れる丈だ」

兄さんは斯う断言しました。さうして、私を其処へ取残した儘、一人でどんどん山道を駆け下りて行きました。其時私も兄さんの口を迸る *Einsamkeit* *meine Heimat* *Einsamkeit* (孤独なるものよ、汝はわが住居なり)といふ獨乙語を聞きました。(同)

一郎は長年自分と同じ屋根の下で一緒に暮っていた家族と心が通じ合わなかつたので、家族から切り離され孤独になり、書齋の人になつてしまつたのである。これに苦惱している一郎はおそらくこれから一切拒否するつもりで、Hさんと旅行に出ていったのである。

旅

行の最中に自然の美を強く感じ、強く魅き付けられ、瞬間的に我を

忘れ、つい自然物に「あれは僕の所有だ」と言った。それを聞いたHさんは、「初めて不審を起し」(同)た。昔からの親友であり、こうして何日も一緒に旅行しているHさんなのに、自分を理解してくれなかったのである。こればかりではなく、浜邊を歩いた時も、自分の悲痛・煩悶の感情と何ら関係のない「宗教」や「神」を取り出して話したのであった。それゆえに一郎はあの問をHさんに投げ掛けたのである。

一郎は長年の親友Hさんとの間でも心が通じないということでも、更なる孤独感を抱き、更なる悲痛の感情に囚われ、その結果、「孤独なるものよ、汝はわが住居なり」という言葉を口にしたのである。「實際孤独の感に堪へない」(同三十七)だが、孤独に安住しなければならぬ境地に陥った一郎は、自らHさんに告白した。

私は其時始めて兄さんの口から、彼がただに社会に立つてのみならず、家庭にあつても一様に孤独であるといふ痛ましい自己を聞かされました。兄さんは親しい私に対して疑念を持つてゐる以上に、其家庭の誰彼を疑つてゐる様でした。兄さんの眼には御父さんも御母さんも偽の器なのです。細君は殊にさう見えるらしいので、兄さんは其細君の頭に此間手を加へたと云ひました。

「一度打つても落付いてゐる。二度打つても落付いてゐる。三度目には抵抗するだらうと思つたが、矢つ張り逆にはない。僕が打てば打つほど向ふはレデーらしくなる。そのために僕は益無頼漢扱ひにされなくては済まなくなる。僕は自分の人格の墮落を証明するために、怒を小羊の上に乗らすと同じ事だ。夫の怒を利用して、自分の優越に誇らうとする相手は残酷ぢやないか。君、女は腕力に訴へる男より遙に残酷なものだよ。僕は何故女が僕に打たれた時、起つて抵抗して呉れなかつたと思ふ。抵抗しないでも好いから、何故一言でも云ひ争つて呉れなかつたと思ふ」

斯ういふ兄さんの顔は苦痛に充ちてゐました。不思議な事に兄さんはこれ程鮮明に自分が細君に對する不快な動作を話して置きながら、その動作を敢へてするに至つた原因に就いては、具体的に殆んど何事も語らないのです。(同)

一郎はこれまでHさんと何日か旅へ出て、自分の悲痛や煩悶をひた隠しに隠して来たが、ここに至つて隠し通すことが出来なくなつてしまい、ついHさんに喋つたのである。しかし、喋つたといつても、根幹から枝葉に至るまで全てを語つたのではなく、断片的にか語らない。この理由は三つを考えられる。まず、もともと問題が問題だったから、つまり「夫婦関係」の問題は中々全てを第三者に語り得る訳がないということであり、次に、問題そのものが、

弟二郎と妻お直の心が交わしているのではないのかという疑惑から発したものだだったので、未だはつきり判断できないことを一郎とて問題にする訳にはいかないということであり、最後に、Hさんがお直を廻るあの「三角関係」に或程度気付いているのではないかと一郎自身思うことで、全てを語ることは出来なかったということである。

一郎は自分の苦悩を抑えられなくなつて、Hさんに断片的な話をしたが、これは旅行中のHさんが始めて一郎の苦悩を受け取つたのである。Hさんはこれからもつと一郎の苦悩を受け取るだろう。

Hさんの手紙で、次に出て来るのがフランスの象徴派詩人マラルメの話である。Hさんが一郎にその話をしたのは、「修善寺を立つて小田原へ来た晩の事」(同三十八)だった。マラルメには「多くの若い崇拜者があり」(同)、彼達はよく彼の「家に集つて、彼の談話に耳を傾ける宵を更した」(同)のだった。「如何に多くの人が押し懸けても」(同)、マラルメの「座るべき場所は必ず暖炉の傍で、彼の腰を卸すのは必ず一箇の揺椅と極つてる」(同)。それは「長い習慣で定められた規則のやうに、誰も犯すものがなかつた」(同)のである。ところが、「ある晩新しい客」(同)のイギリスのシモンズが来て、「マラルメの坐るべきかの特別の椅子へ腰を掛けて仕舞」つた。そこで「マラルメは不安になり」(同)、「何時ものやうに話に實が入」(同)らず、「一座は白け」(同)てしまったのである。

Hさんはマラルメの話をした後、「何といふ窮屈な事だらう」(同)と断案を下し、一郎に「君の窮屈な程度はマラルメよりも烈しい」(同)と言つたのである。この後、Hさんの主観的な断定を續いて語つていたのである。Hさんが思つた一郎は「鋭敏な人」(同)であり、「美的にも倫理的にも、智的にも鋭敏過ぎて、つまり自分を苦しめに生れて来たやうな結果に陥」(同)り、しまいに「自分程進んでゐない世の中を忌」(同)んでいるのである。だが、一郎は「唯の我儘とは違」(同)い、勿論「椅子を失つて不安になつたマラルメの窮屈」(同)でもないのである。Hさんは一郎を「其苦しみに堪へ切れないで水に溺れかかつた人のやうに、只管藻掻いてゐる」(同)と見え、「何うかして其苦みから」(同)一郎を「救ひ出したい」(同)と思つるので、宗教を「最後の手段として」(同)、鋭くなつた一郎の眼を、「ただ落付を興へる目的のために、再び味く」(同)することにしたのである。Hさんのこの方案はうまく行けるのか。

「死ぬか、氣が違ふか、夫でなければ宗教に入るか。僕の前途には此三つのものしかない」

兄さんは果して斯う云ひ出しました。其時兄さんの顔は、寧ろ絶望の谷に赴く人の様に見えました。

「然し宗教には何うも這入れさうもない。死ぬのも未練に食ひ

留められさうだ。なればまあ氣違だな。然し未来の僕は借置いて、現在の僕は君正氣なんだらうかな。もう既に何うかなつてゐるんぢやないかしら。僕は怖くて堪らない」

(中略)

「椅子位失つて心の平和を乱されるマラルメは幸ひなものだ。僕はもう大抵なものを失つてゐる。僅かに自己の所有として残つてゐる此肉体さへ、(此手や足さへ、)遠慮なく僕を裏切る位だから」

(中略)然し中断するのも兄さんの心なら、中断されるのも兄さんの心です。兄さんは詰る所二つの心に支配されてゐて、其二つの心が嫁と姑の様に朝から晩迄責めたり、責められたりしてゐるために、寸時の安心も得られないのです。(同三十九)

Hさんは前途としての「三つのもの」の中で最も可能性の少ない「宗教」に這入ることを一郎を救済する手段としようとしたが、一郎にとつて、これは自分の苦悩の核に達し得ないばかりか、その苦悩に変に蓋をして来る様なものである。一郎の「此肉体さへ、(此手や足さへ)遠慮なく僕を裏切る」(同)という言葉は、あの心的な交せをしない、この世で認められた夫婦としてお直に肉体的に求め様々に交わつて来た一郎が、己の肉体に対する認識的かつ反省的な言葉としてつい漏らしてしまつたものなのである。

Hさんは「三つのもの」を一郎から提示された時、人間の一人として、無論「自殺」することも「氣違」になることも勧めたり促したりする訳がないので、そこで最も可能性が少ない「宗教」を一郎に強く勧めたのである。

私はとうとう兄さんの前に再び神といふ言葉を持ち出しました。さうして意外にも突然兄さんから頭を打たれました。然し是は小田原で起つた最後の幕です。頭を打たれる前にまだ一節ありますから、先それから御報知しようと思ひます。(同)

Hさんは前置きがあつて、「宗教」の話を交わしながらモハメツドの話をするのである。モハメツドは「向ふに見える大きな山を、自分の足元へ呼び寄せて見せる」(同)「それを見たいものは何月何日を期して何処へ集れ」(同)と言つて幾多の群衆を集め、期日になつて彼は三度も「向ふの山に此方へ来いと命令」(同四十一)したが、結局山が来なかつたので、「約束通り自分は山を呼び寄せた。然し山の方では来たくないやうである。山が来て呉れない以上は、自分が行くより外に仕方があるまい」(同)と言つて、「すたすた山の方へ歩いて行つた」(同)のである。これについて、Hさんと一郎が議論するようになったのである。

「何故山の方へ歩いて行かない」

私が兄さんに斯う云つても、兄さんは黙つてるゐます。私は

兄さんに私の主意が徹しないのを恐れて、附け足しました。

「君は山を呼び寄せる男だ。呼び寄せて来ないと怒る男だ。地團太を踏んで口惜しがる男だ。さうして山を悪く批判する事丈を考へる男だ。何故山の方へ歩いて行かない」

「もし向ふが此方へ来るべき義務があつたら何うだ」と兄さんが云ひます。

「向ふに義務があらうとあるまいと、此方に必要があれば此方で行くだけの事だ。」と私が答へます。

「義務のない所に必要のある筈がない」と兄さんが主張します。「ぢや幸福の爲めに行くさ。必要のために行きたくないなら」と私が又答へます。

(中略)けれども是非、善悪、美醜の区別に於いて、自分の今日迄に養ひ上げた高い標準を、生活の中心としなければ生きてゐられない兄さんは、さりとそれを擲つて、幸福を求めぬ氣になれないのです。寧ろそれに振ら下がりがら、幸福を得ようと焦燥するのです。さうして其矛盾も兄さんには能く呑み込めてゐるのです。

「自分を生活の心棒と思はないで、綺麗に投げ出したら、もつと楽になれるよ」と私が又兄さんに云ひました。

「ぢや何を心棒にして生きて行くんだ」と兄さんが聞きました。「神さ」と私が答へました。(同)

「山の方へ歩いていった」という行動を取る人は、「仕方があるまい」と云つたり考えたりして、「仕方があるまい」の次元(つまり考えた後の行動)に初めは消極的にそのうち積極的に留まつたのである。これは「宗教」の立場の意識であれば、「仕方があるまい」を本当にそうなのかという風に何処までも追求し、「仕方があるまい」の次元(一郎の場合は義務がないという考え)を何処までも飛び越えようとするのが、一郎の立場の意識だったということである。おごり高ぶっている一郎の姿ははつきり見届けるではないだろうか。このような一郎は「宗教」と絶対に無縁であると言えるだろう。

Hさんの「自白」によつて、Hさんの己は全く「宗教」を信じてもないのに、一郎に「宗教」を強く勧めるといつた態度は、ますます一郎を苦悩や煩悶に追い詰めてしまったのである。ここで一郎とHさんの議論をもう少し引用して見る事にする。

私「世の中の事が自分の思ふ様にばかりならぬ以上、そこに自分以外の意志が働いてゐるといふ事實を認めなくてはなるまい」

「認めてゐる」

私「さうして其意志は君のよりも遙に偉大ぢやないか」
「偉大かも知れない、僕が負けるんだから。けれども大概は僕

のよりも不善で不美で不真だ。僕は彼等に負かされる訳がないのに負かされる。だから腹が立つのだ」

(中略)

「死なうが生きようが、神の方で好いやうに取計つて呉れると思つて安心してゐるね」

私「まあ左右だ」

私は兄さんから斯う詰寄せられた時、段々危しくなつて来るやうな氣がしました。けれども前後の勢ひが自分を支配してゐる最中なので、また何うする訳にも行きません。すると兄さんが突然手を挙げて、私の横面をぴしやりと打ちました。

(中略)

「乱暴ぢやないか」と私が云ひました。

「それ見ろ。少しも神に信賴してゐないぢやないか。矢張り怒るぢやないか。一寸した事で氣分の平均を失ふぢやないか。落付が顛覆するぢやないか」(同四十一)

これまでも見て来た通り、一郎は、嫌だという本心をとにかく隠し、押さえ、一所に旅行へ出たので、「自分に誠実でない」(「塵勞」三十六)とか「君の言動は、誠を装ふ偽りに過ぎない」とかいふ激しい言葉を、直接Hさんに向つて以前投げ付けたのだが、「宗教」を信じてもないのにそれをわざわざ強く勧めるといったこのHさんの態度は、やはり同じ様に「自分に誠實でない」、「誠を装ふ偽りに過ぎない」行為として一郎に捉えられ、其の事自体が一郎の苦惱を一層募らせてしまつたのである。その揚句、一郎はHさんに手を加えてしまつたのである。

ところで、Hさんは一郎の手を出した行為を了解もし納得もしていった。Hさんは一郎の次のように思った。

私は兄さんの頭が、私より判然と整つてゐる事に就いて、今でも少しの疑ひを挟む余地はないと思ひます。然し人間として今の兄さんは、故に較べると、何処か乱れてゐるやうです。さうして其乱れる原因を考へて見ると、判然と整つた彼の頭の働き其物から来てゐるのです。私から云へば、整つた頭には敬意を表したいし、又乱れた心には疑ひを置きたいのですが、兄さんから見れば、整つた頭、取りも直さず乱れた心なのです。

(同四十二)

一郎の頭と心は何処に矛盾している。特に、一郎の心は乱れていふところとは一郎自身もHさんにも分つてゐるのである。一郎が最早決定的破局を迎えたこと、一郎とお直の間の最早決定的破局を迎えたことから遣つて来るそのとてつもない孤独感故なのである。一郎は、己にも又相手のお直にも、二人が決定的破局を迎えたことを判然示すためにも旅行に出て来たのである。

る。實際旅行に出てからの彼の苦惱は拍車をかける一方だったのである。

その後、一郎の苦惱が最高潮に達したことの具体的な表現と思われる場面が遣つて来たのである。箱根で一郎が「凄まじい雨に打たれて、谷崖の容赦なく無暗に運動するのだと主張し」(同四十三)たのである。

兄さんはすぐ呼息の塞るやうな風に向つて突進しました。水の音だか、空の音だか、何とも蚊とも喩へられない響の中を、地面から跳ね上る護謨球のやうな勢ひで、ぼんぼん飛ぶのです。さうして血管の破裂する程大きな声を出して、ただわあつと叫びます。其勢ひは昨夜の隣室の客より何層倍猛烈だか分りませぬ。声だつて彼よりも遙に野獣らしいのです。(同)

苦惱が最高潮に達した一郎は、自分の肉体を痛めつけて、その苦惱から脱出しようと思われる。土砂降りの風雨の中を「谷崖の容赦なく無暗に運動」(同)した一郎は、宿に帰り「湯に這入つて暖まつた時」(同)「しきりにへ痛快だ」と云「同」つたということは、恐らく一郎は、その苦惱の最高の状態から少し解放されて来たと言えるだろう。その後の一郎は段々落付くやうになつたのであつた。

鎌倉の別荘に留つた間に、一郎はHさんに主に二つの事を語つていたのである。一つは己の判断や反省の言葉としてのお貞の話で、もう一つは己の願望としての「昔の坊さん」に纏わる話である。お貞の話は既に言及したので、ここでは再び論究せず、「昔の坊さん」の話を考察していく。

坊さんの名前は香巖と云い、香巖は「聰明伶俐」(「塵勞」五十)や「多知多解」(同)が「悟道の邪魔になつて、何時迄経つても道に入れなかつた」(同)者であるのだが、そんな彼は、とうとう「今迄集めた書物をすつかり焼き棄てて仕舞」(同)い、もう悟ることを締め、そうして「一切を放下し」(同)、それからある閑寂な所を選んで小さな庵を建てる氣で、「草を芟り」(同)「株を掘り起し」(同)たりしたのだつた。彼が「地ならしをするために、そこにある石を取つて除け」(同)ると、「其石の一つが竹藪に中つて戛然と鳴り」(同)、彼は「此朗かな響を聞いて、はつと悟つたさう」(同)である。

「戛然と鳴り」その音は、澄んだ非常に良い音であり、香巖にとつては、生れて初めて聞いた様なこの世の物とは思われない程の素晴らし音である。香巖は自分がこれまで「書物上の知識」ばかりを尊重し、それ以外の物には殆んど目を塞いで来て、「書物上の知識」でこの世の全てを理解し味わうことが出来ると思つていたが、この音を聞いた後、「書物上の知識」はこの世の全てを理解し味わうことが出来ないということが解つたのであつた。「悟り」はこれまで全く

見えたり感じられたりしなかった物が、ある物事を契機として新しく見えたり感じられたりして来るといふことなのである。そうして、それから人は、新しく見えたり感じられたりした物と元から見えたり感じられたりした物との止揚へと、意識的にも無意識的にも乗り出して行くのであり、また行かねばならないのである。

一郎は香巖の話をした後、願望として「何うかして香巖になりたい」(同) と言ひ出したのである。一郎は見て来た通り、「宗教」に何うも入れそうがないので、「香巖になりたい」(同) という言葉は一郎がこれまで全く見えたり感じられたりしなかった物が新しく見えたり感じられたりすることが出来るようになる為の、或る契機をつかみたいという願望を託するのである。

一郎の苦悩が他者との関係によつて生起するというよりは、むしろ一郎個人の実存的苦悩が他者との関係において、問題を生起させるのである。一郎の被害者意識は、作品の終末部に至つて始めて自分もまた加害者であるという視点が現れてくるのである。一郎の苦悩がお直との相対的な関係から醸し出されたものというよりは、むしろ人間存在の根源にある絶対的な問題に根ざすものであったことである。他者から切り離され、孤独の「牢屋」(「兄」十六) に閉じ込められた一郎は将来が何処にあるのか。次はこの問題を考察する。

第三章 一郎の行方

一郎が自分の前途は「死ぬか、氣が違ふか、夫でなければ宗教に入るか。」（「塵勞」三十九）と口に出した。そう思っている一郎は一体どうなっていくのか。一郎は「宗教には何うも這入れさうもない」（同）と一つの選択を排除した。更に、「死ぬのも未練に食ひ留められさうだ」（同）。この時点の一郎は「なればまあ氣違だ」（同）。しかし、このような一郎は同じ状態にならない。なぜなら、この時点の一郎は「怖くて堪らない」（同）からである。このような不安定な状況のなかで、一郎の最終の行方は何処に居るのか。

一郎とHさんは旅へ出って、修善寺へ行つたのである。そこで山に登った。途中、一郎が、「茂みの中に咲いてゐる百合」（同三十六）の「白い花片」（同）や「足の下に見える森だの谷だの」（同）を指さし、「あれは僕の所有だ」（同）と言つたのである。それは大変な悲痛の感情に満ちた旅行の最中で、一郎があつた「一瞬の中の永遠」（同）とも言える美を強く感じ取つてしまつたのである。ところで、芥川龍之介の「遺書」（注34）によると、本当に自殺を決意した時、却つて自然は何時よりも一層美しく、愛せるものである。現在、一郎にも同じく自然はその様なものだった。妻お直とのことでは、現在絶望と悲痛の感情に満ちていたのだからこそ、一郎は、百合の「白い花片」や「森だの谷だの」の自然美に、突如としてあの「一瞬の中の永遠」とも言える美を強く感じ、強く魅き付けられ、一瞬我を忘れてしまつたということだったのである。

『行人』は一郎とHさんが一緒に鎌倉の海浜で旅行しているという状況で幕を閉じた。漱石が次に書いた作品は『心』である。他者に与えた罪の救済として死を求めるといふ主題の『心』の物語は鎌倉の海辺から始まる。これは偶然な出来事なのか、何の関係があるのか。この問題を考える前に漱石の後期三部作と呼ばれている『彼岸過迄』、『行人』と『心』の共通の特色を挙げて見ることにする。この三部作の共通の特色と言へば、各篇を重ね合わせて長篇を構成するという手法であり、見る人あるいは語り手を通して、主人公が見えてくるといふ特殊な方法を採用、また手紙が重要な役割があるという三点が上げられる。この三部作は構成上に参考になる所があると考えられる。『心』では、「先生」が静かに自殺したことは作品で書かれている。一郎も「先生」のように自殺することも考えられないことはない。二郎が「今になつて、取り返す事も償ふ事も出来ない」（「兄」四十二）という話があることも解明できる。

「塵勞」の最終節で、Hはつぎのようについて。

私が此手紙を書き始めた時、兄さんはぐうぐう寝てゐました。

此手紙を書き終る今も亦ぐうぐう寝てゐます。私は偶然兄さん

の寝てゐる時に書き出して、偶然兄さんの寝てゐる時に書き終る私を妙に考へます。兄さんが此眠から永久覚めなかつたら嘸幸福だらうといふ氣が何処かです。同時にもし此眠から永久覚めなかつたら嘸悲しいだらうといふ氣も何処かです。

（「塵勞」五十二）

Hのことばには、悲劇の予感が濃く染めつけられている。このHさんの手紙が二人が旅へ出た十一日目の晩にやつと来たが、待ちがたい原因は「書く機会を見付けよう見付けようと思つても、そんな機会機会の出て来る筈がない」（同二十八）とHさんが言つたのである。「然し偶然」（同）機会が出て、Hさんが二郎へ手紙を書き出したのである。ここに注目したいのは、Hさんの手紙は「頁の数から云つても、二時間や三時間で出来る仕事ではなかつた。」（同）という事である。これらは何所が不思議に感じさせ、一郎の眠り方は死のような眠り方と思わせてしまうのである。

「塵勞」十五節で、次のようなHさんの話があつた。

兄は其時しきりに死といふものに就いて云々したさうである。彼は英吉利や亜米利加で流行る死後の研究といふ題目に興味を有つて、大分其方面を調べたさうである。（同十五）

一郎は無意識的に死の問題を考え、「思想の上で動揺して落付かないで弱つている」（同）のではないだろうか。

小森陽一氏は「先生」が自殺した後、「私」と「奥さん」が一緒に生活をしているという指摘がある（注35）。大胆だが、『行人』の場合では、一郎が自殺した後、二郎は「長野家」の継承者になり、直と一緒暮していることは推測できないこともない。語り手は二郎である限り、読者は、『行人』の物語が何の残酷な事が起つたようと強く感じたが、説明できないという事も当然である。

私はようやく『行人』について書き終えたが、作品を読み返すたびに新たな音色が聞こえて来たりするので、当初の予想を変えなければならぬ。漱石がそれだけ深いかということと共に、これまでの漱石の作品に対する読みの浅さを強く実感した。

たとえば、『行人』を読み始めた頃、二郎と直の間に愛が存在していると思っただけ、読み返すことにより否定された。中断による作品の主題や構想の「裂け目」を重視していたが、読み返すことによつて一郎の苦悩に目を向けることにした。

『行人』は漱石の作品中でも『それから』と並んで二組み（以上）の夫婦がともに住む直系家族の家庭を描いた数少ない小説である（注36）という指摘が平岡敏夫氏にあるが、「人間の作つた夫婦といふ関係よりも、自然が醸した恋愛の方が、実際神聖だ」（「帰つてから」二十七）という恋愛観を持つている一郎は夫婦関係の不幸に苦しんでいるのである。お直への不信に苦しんだ一郎は自分が被害者であると思つたものの、「何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪になるのだ。さういふ僕が既に僕の妻を何の位悪くしたか分らない。自分が悪くした妻から、幸福を求めるのは押が強過ぎるぢやないか。幸福は嫁に行つて天真を損はれた女からは要求出来るものぢやない。」（「塵勞」五十一）ということを自覚し、自分が加害者でもあることを認識した。

一郎の苦悩は不安感と孤独感である。「自分のしてゐる事が、自分の目的になつてゐない程苦しい事はない」（同三十一）という目的意識のない不安感である。

一郎に関して、彼の両親は「ああ育てる積ぢやなかつたんだがね」（同十一）「あれぢや困りますよ」（同）という会話をかわすことになる。また「彼等（ことに母）は兄一人のために宅中の空気が湿つぽくなるのを辛いと云つた。尋常の父母以上にわが子を愛して来たといふ自信が、彼等の不平を一層濃く染めつけた。彼等はわが子からは程不愉快にされる因縁がないと暗に主張してゐるらしく思はれた」（同十二）ともされている。

「長野家」を支えるべき次代の家長として育て上げられたはずの一郎は、「長野家」をまとめ上げていくどころか家族のなかで次第に孤立を深めていく。一郎が孤独に突っ込んでいった時、「死ぬか、氣が違ふか、夫でなければ宗教に入るか。僕の前途には此三つのものしかない」（同三十九）という所まで追い詰められる。

『行人』は一郎の苦悩が終息しないまま放置され、「人間と合はないので、已を得ず自然の方に心を移す譯になるんだらうかな」（「帰つてから」六）という一郎が、静かな自然の中で死にも似た深い眠

りについている様子を描きつつ閉じられる。
本研究では、「友達」の章と一郎の苦悩に関する内在的なつながり
にはあまり触れていないが、今後の課題として『行人』の一貫性を
深く考察するつもりである。

注

序章

注 1 漱石作品論集成【第九卷】……『行人』 桜楓社 平成3・2・10 鼎談二
七三

注 2 宮本百合子『行人』について『漱石作品論集成「行人」第9巻』桜楓社
平成3・2 二四頁

注 3 小宮豊隆『夏目漱石三』 岩波書店 昭和28・10 一八四頁

注 4 瀬沼茂樹『夏目漱石』 東京大学出版会 昭和45・7 二二九頁

注 5 江藤淳『決定版 夏目漱石』 新潮社 昭和49・11 一〇五頁

注 6 梶木剛『夏目漱石論』 勁草書房 昭和51・6 一四三頁

注 7 樋野憲子『行人』論―則天去私の視点から―『国文目白』10号 日本女子
大学 昭和46・3

注 8 橋本佳『行人』について『国語と国文学』44巻7号 東京大学国語国
文学会 昭和42・7

注 9 伊豆利彦『行人』論の前提『漱石作品論集成「行人」第9巻』 桜楓社
平成3・2 七七頁

注 10 重松泰雄『行人』の主題―とくに〈二郎説話〉の意味するもの―『漱
石その歷程』 おうふう（桜楓社）平成6・3

注 11 竹腰幸夫『行人』の主題『中央大学国文』14号 中央大学国文学会
昭和46・2

注 12 宮井一郎『漱石の世界』 講談社 昭和42・10 一五八頁

注 13 注9に同じ

注 14 注10に同じ

第一章

- 注 32 西垣勤 「「行人」自我と愛の相克」『国文学』5卷 関西大学昭和55・2・10
- 注 31 注 23に同じ 三〇九〜三一〇頁
- 注 30 注 23に同じ 一二六〜一二七頁
- 注 29 注 24に同じ 一四四頁
- 注 28 注 23に同じ。一一九頁
- 注 27 注 23に同じ 三〇七頁
- 注 26 注 24に同じ 一四五頁
- 注 25 『漱石全集』第二十四卷 岩波書店 昭和32・5・13 八十八頁
- 注 24 『漱石全集』第二十六卷 岩波書店 昭和32・6・12 一三九頁
- 注 23 夏目鏡子『漱石の思い出』 角川書店 昭和41・3 三〇三〜三〇六頁
- 注 22 荒正人『漱石研究年表』 集英社 昭和59・6・20 七四六頁
- 注 21 注 18に同じ 一七九頁
- 注 20 注 18に同じ 一七六頁
- 注 19 注 18に同じ 一七〇頁
- 注 18 『漱石全集』第三十卷 岩波書店 昭和32・8・12 一四九頁
- 注 17 橋川文三「市民的家族観の形成 日本的知識人の思想と家」『講座家族 8
家族観の系譜 総索引』 弘文堂 昭和49・9
- 注 16 河田嗣郎「家族制度ノ崩壊カ社会生活ニ及ホス影響」『家族制度研究』 弘
文堂 大正12・3
- 注 15 荒正人『漱石研究年表』 集英社 昭和59・6・20 六九〇頁

第二章

注 33 夏目漱石「現代日本の開化」『漱石全集 第十六卷』 岩波書店 平成7・4・

19

第三章

注 34 大正五年頃「遺書」では、「己は死ぬ、遅くとも未来の十月迄には死ぬ」『芥

川龍之介全集 第十五卷』岩波書店 昭和30・7・6。

小穴隆一宛書簡(昭2・5・17)では「函館は殺風景を極めた所なり(中略)、
こちらは桜さきさき黄水仙さき桜すずめと云ふ鳥蹄き居り候あひ変らず憂
鬱夜々即時に死ぬる支度をして休みをり候」と書いている。自殺を決意し
ていた芥川は、旅行の疲れもあって暗澹たる思いで函館の日を過ごしたよ
うだ。『芥川龍之介全集 第十八卷』岩波書店 昭和30・7・21。

注 35 小森陽一『『こころ』を生成する『心臓』』『成城国文学』1号 成城国文

学会 昭和60・3

終章

注 36 平岡敏夫「行人」―淋しい文学― 『漱石研究』 有精堂 昭和62・9

参考文献目録

テキスト

漱石文学全集 全十巻

集英社

昭和
5・8
3

単行本

夏目鏡子述・松岡譲筆録『漱石の思ひ出	岩波書店	昭和 4 ・ 10
小宮豊隆著『漱石の芸術』	岩波書店	昭和 17 ・ 12
滝沢克己著『夏目漱石』	清水書房	昭和 21 ・ 9
平田次三郎著『夏目漱石』	河出書房	昭和 23 ・ 10
荒正人著『評伝 夏目漱石』	実業之日本社	昭和 30 ・ 7
岡崎義恵著『漱石と微笑』	東京ライフ社	昭和 31 ・ 2
坂垣直子著『漱石文学の背景』	鱒書房	昭和 31 ・ 7
夏目伸六著『父夏目漱石』	文藝春秋新社	昭和 31 ・ 11
千谷七郎著『漱石の病跡―病氣と作品から―』	勁草書房	昭和 38 ・ 8
高木文雄著『漱石の道程』	審美社	昭和 41 ・ 12
駒尺喜美著『漱石―その自己本位と連帯と―』	八木書店	昭和 45 ・ 5
越智治雄著『漱石私論』	角川書店	昭和 46 ・ 6
熊坂敦子著『夏目漱石の研究』	桜楓社	昭和 48 ・ 3
水谷昭夫著『漱石文芸の世界』	桜楓社	昭和 49 ・ 2
江藤淳著『決定版 夏目漱石』	新潮社	昭和 49 ・ 11
桶谷秀昭著『夏目漱石論』	河出書房新社	昭和 51 ・ 6

内田道雄・久保田芳太郎編	『作品論 夏名漱石』	双文社出版	昭和51・9
平岡敏夫著	『漱石序説』	塙書房	昭和51・10
坂本浩著	『夏目漱石―作品の深層世界』	明治書院	昭和54・4
土居健郎著	『漱石の心的世界』	角川書店	昭和57・11
三好行雄著	『鑑賞 日本現代文学 第五卷 夏目漱石』	角川書店	昭和59・3
宮井一郎著	『漱石文学の全貌 下巻』	国書刊行会	昭和59・5
越智治雄著	『漱石と文明 文学論集2』	砂子屋書房	昭和60・8
松元寛著	『夏目漱石―現代人の原像』	新地書房	昭和61・6
佐藤泰正著	『夏目漱石論』	筑摩書房	昭和61・11
平岡敏夫著	『漱石研究』	有精堂	昭和62・9
坂口曜子著	『魔術としての文学―夏目漱石論―』	沖積舎	昭和62・10
秋山公男著	『漱石文学論考―後期作品の方法と構造―』	桜楓社	昭和62・11
相原和邦著	『漱石文学の研究―表現を軸として―』	明治書院	昭和63・2
玉井敬之著	『漱石研究への道』	桜楓社	昭和63・5
大岡昇平著	『小説家夏目漱石』	筑摩書房	平成元・5
山本勝正著	『夏目漱石文芸の研究』	桜楓社	平成元・6
酒井英行著	『漱石 その陰翳』	有精堂	平成2・4
西垣勤著	『漱石と白樺派』	有精堂	平成2・6
佐々木充著	『漱石推考』	桜楓社	平成4・1
松元寛著	『漱石の実験―現代をどう生きるか』	朝文社	平成5・6

清水孝純著	『漱石その反オイディプス的世界』	翰林書房	平成5・10
重松泰雄著	『漱石 その歷程』	おうふう（桜楓社）	平成6・3
熊坂敦子著	『夏目漱石の世界』	翰林書房	平成7・8
石原千秋著	『反転する漱石』	青土社	平成9・11
関谷由美子著	『漱石・藤村（主人子）の影』	愛育社	平成10・5
赤井恵子著	『漱石という思想の力』	朝文社	平成10・11
江藤淳著	『漱石とその時代 第五部』	新潮社	平成11・2
荻原桂子著	『夏目漱石の作品研究』	花書院	平成12・3
玉井敬之編	『漱石から漱石へ』	翰林書房	平成12・5
佐藤裕子著	『漱石解読―語りへの構造』	和泉書院	平成12・5
仲秀和著	『漱石―『夢十夜』以後―』	和泉書院	平成13・3
佐藤泰正編	『漱石を読む』	笠間書院	平成13・4
塚越和夫・千石隆志共著	『漱石論考』	葦真文社	平成14・4
若山滋著	『漱石まちをゆく―建築家になろうとした作家』彰国社		平成14・9
水川隆夫著	『漱石と仏教―則天去私への道』平凡社		平成14・9
吉本隆明著	『夏目漱石を読む』	筑摩書房	平成14・11
増満圭子著	『夏目漱石論―漱石文学における「意識」―』和泉書院		平成16・6
浅田隆・戸田民子編	『漱石作品論集成 第九卷 行人』桜楓社		平成3・4
安藤章二著	『私論夏目漱石―『行人』を軸として―』桜楓社		平成7・11
盛忍著	『漱石「行人」論』	作品社	平成18・5

単行本所収論文

- 小宮豊隆 『行人』
（小宮豊隆著 『漱石の芸術』 岩波書店 昭和17・12）
- 滝沢克己 『行人』
（滝沢克己著 『夏目漱石』 清水書房 昭和21・9）
- 平田次三郎 「夫婦の論理」
（平田次三郎著 『夏目漱石』 河出書房 昭和23・10）
- 荒正人 『行人』
（荒正人著 『評伝 夏目漱石』 実業之日本社 昭和30・7）
- 岡崎義恵 『「行人」のお直』
（岡崎義恵著 『漱石と微笑』 東京ライフ社 昭和31・2）
- 坂垣直子 「「行人」の西欧的主題」
（坂垣直子著 『漱石文学の背景』 鱒書房 昭和31・7）
- 千谷七郎 『「行人」の作品形式』
（千谷七郎著 『漱石の病跡―病氣と作品から―』 劉草書房 昭和38・8）
- 千谷七郎 『「行人」の中味』
（千谷七郎著 『漱石の病跡―病氣と作品から―』 劉草書房 昭和38・8）
- 高木文雄 「ゆるめの欠乏―『行人』」
（高木文雄著 『漱石の道程』 審美社 昭和41・12）
- 駒尺喜美 「「行人」論―到着点と出発点と―」
（駒尺喜美著 『漱石―その自己本位と連帯と―』 八木書店 昭和45・5）
- 越智治雄 『一郎と二郎』
（越智治雄著 『漱石私論』 角川書店 昭和46・6）
- 熊坂敦子 「『行人』―我執の風化―」
（熊坂敦子著 『夏目漱石の研究』 桜楓社 昭和48・3）
- 水谷昭夫 「『行人』の世界―その苦悩と狂気の構造について」
（水谷昭夫著 『漱石文芸の世界』 桜楓社 昭和49・2）

- 江藤淳 「「行人」―「我執」と「自己抹殺」」
 (江藤淳著 『決定版 夏目漱石』 新潮社 昭和49・11)
- 江藤淳 「「行人」の孤独と東洋的自然観」
 (江藤淳著 『決定版 夏目漱石』 新潮社 昭和49・11)
- 江藤淳 「明治の一知識人」
 (江藤淳著 『決定版 夏目漱石』 新潮社 昭和49・11)
- 桶谷秀昭 「相对と絶対の間―『行人』」
 (桶谷秀昭著 『夏目漱石論』 河出書房新社 昭和51・6)
- 久保田芳太郎 「『行人』―男と女について―」
 (内田道雄・久保田芳太郎編 『作品論 夏目漱石』 双文社出版 昭和51・9)
- 平岡敏夫 『「行人」その周辺』
 (平岡敏夫著 『漱石序説』 塙書房 昭和51・10)
- 坂本浩 「「行人」の内在的問題―墮地獄の孤独―」
 (坂本浩著 『夏目漱石―作品の深層世界』 明治書院 昭和54・4)
- 土居健郎 「「行人」について」
 (土居健郎著 『漱石の心的世界』 角川書店 昭和57・11)
- 三好行雄 「行人」
 (三好行雄著 『鑑賞日本現代文学 第五卷 夏目漱石』 角川書店 昭和59・3)
- 宮井一郎 「我執三部作―『行人』」
 (宮井一郎著 『漱石文学の全貌 下巻』 国書刊行会 昭和59・5)
- 松元寛 「『彼岸過迄』から『行人』へ」
 (松元寛著 『夏目漱石―現代人の原像』 新地書房 昭和61・6)
- 佐藤泰正 「『行人』〈信〉と〈狂気〉のはざまに」
 (佐藤泰正著 『夏目漱石論』 筑摩書房 昭和61・11)
- 平岡敏夫 「「行人」―淋しい文学」
 (平岡敏夫著 『漱石研究』 有精堂 昭和62・9)
- 坂口曜子 「死との親和の向こうに―『行人』論」

- (坂口曜子著『魔術としての文学―夏目漱石論―』 沖積舎 昭和 6・2・1)
- 秋山公男『行人』 昭和 6・2・1)
- (秋山公男著『漱石文学論考―後期作品の方法と構造―』桜楓社 昭和 6・2・1)
- 相原和邦『近代人の苦悩―「行人」』 明治書院 昭和 6・3・2)
- (相原和邦著『漱石文学の研究―表現を軸として―』 明治書院 昭和 6・3・2)
- 玉井敬之『『行人』論への一視点―「友達」の場合』 桜楓社 昭和 6・3・5)
- (玉井敬之著『漱石研究への道』 桜楓社 昭和 6・3・5)
- 玉井敬之『『行人』論覚書―「夫婦という関係」をめぐって』 桜楓社 昭和 6・3・5)
- (玉井敬之著『漱石研究への道』 桜楓社 昭和 6・3・5)
- 大岡昇平『文学と思想―『行人』をめぐって』 筑摩書房 平成元・5)
- (大岡昇平著『小説家夏目漱石』 筑摩書房 平成元・5)
- 山本勝正『「行人」論―「三つの話」にみられる一郎の思いと苦悩―』 桜楓社 平成元・6)
- (山本勝正著『夏目漱石文芸の研究』 桜楓社 平成元・6)
- 酒井英行『『行人』への一視点―精神病の「娘さん」―』 有精堂 平成2・4)
- (酒井英行著『漱石 その陰翳』 有精堂 平成2・4)
- 西垣勤『行人』 有精堂 平成2・6)
- (西垣勤著『漱石と白樺派』 有精堂 平成2・6)
- 米田利昭『男の不安、女の苦悩―『行人』』 勁草書房 平成2・8)
- (米田利昭著『わたしの漱石』 勁草書房 平成2・8)
- 佐々木充『『行人』異見』 桜楓社 平成4・1)
- (佐々木充著『漱石推考』 桜楓社 平成4・1)
- 松元寛『『彼岸過迄』から『行人』へ』 朝文社 平成5・6)
- (松元寛著『漱石の実験―現代をどう生きるか』 朝文社 平成5・6)
- 清水孝純『方法としての狂気―『行人』試論』 翰林書房 平成5・1)
- (清水孝純著『漱石その反オイディプス的世界』 翰林書房 平成5・1)
- 清水孝純『此岸にして彼岸へ―『行人』一郎の苦闘』 翰林書房 平成5・1)
- (清水孝純著『漱石その反オイディプス的世界』 翰林書房 平成5・1)
- 重松泰雄『「行人」の主題―とくに(二郎説話)の意味するもの―』 翰林書房 平成6・3)
- (重松泰雄著『漱石 その歷程』 翰林書房 平成6・3)
- 熊坂敦子『『行人』―絶対即相対』 翰林書房 平成7・8)
- (熊坂敦子著『夏目漱石の世界』 翰林書房 平成7・8)
- 石原千秋『階級のある言葉『行人』』 翰林書房 平成7・8)

- (石原千秋著 『反転する漱石』 青土社 平成9・11)
- 関谷由美子『『行人』論―現在位相からの遁走』 愛育社 平成10・5)
- (関谷由美子著『漱石・藤村(主人公)の影』 愛育社 平成10・5)
- 赤井恵子『『行人』論―空洞をめぐる言説』 朝文社 平成10・11)
- (赤井恵子著 『漱石という思想の力』 朝文社 平成10・11)
- 江藤淳 『『行人』の完結』 新潮社 平成11・12)
- (江藤淳著 『漱石とその時代 第五部』 新潮社 平成11・12)
- 荻原桂子『『行人』論―「一郎」の苦悩』 花書院 平成12・3)
- (荻原桂子著 『夏目漱石の作品研究』 花書院 平成12・3)
- 浅田隆『『行人』私議―二枚の鏡』 翰林書房 平成12・5)
- (玉井敬之編 『漱石から漱石へ』 翰林書房 平成12・5)
- 佐藤裕子「僕は死んだ神より生きた人間の方が好きだ」―『行人』論』 和泉書院 平成12・5)
- (佐藤裕子著『漱石解説―(語り)の構造』 和泉書院 平成12・5)
- 仲秀和『『行人』論―「謎」と「一郎の内部世界」―』 和泉書院 平成13・3)
- (仲秀和著 『漱石―『夢十夜』以後―』 和泉書院 平成13・3)
- 田中実「「整った頭」と「乱れた心」―『行人』私論―』 笠間書院 平成13・4)
- (佐藤泰正編 『漱石を読む』 笠間書院 平成13・4)
- 塚越和夫「愛と嫉妬の構図Ⅱ (『行人』の場合)』 葦真文社 平成14・4)
- (塚越和夫・千石隆志共著『漱石論考』 葦真文社 平成14・4)
- 若山滋「不安の宿『行人』」 彰国社 平成14・9)
- (若山滋著 『漱石まちをゆく―建築家になろうとした作家』 彰国社 平成14・9)
- 水川隆夫「『行人』と「模倣と独立(死か狂気か宗教か)」」 平凡社 平成14・9)
- (水川隆夫著 『漱石と仏教―則天去私への道』 平凡社 平成14・9)
- 吉本隆明『行人』 筑摩書房 平成14・11)
- (吉本隆明著 『夏目漱石を読む』 筑摩書房 平成14・11)
- 増満圭子『行人』

(増満圭子著 『夏目漱石論―漱石文学における「意識」―』

和泉書院

平成
1・6・6)

雑誌掲載論文

秋山公男 「『行人』の構想と構造―一郎・お貞の相位に関する一考察―

(『国語と国文学』⁶巻¹⁰号 東京大学国語国文学会 昭和
5・4・1)

佐藤泰正 「『行人』―その主題と方法―」

(『文学』⁴8―2号 岩波書店 昭和
5・5・2)

秋山公男 「『行人』―その主題と構造―(一)―」

(『立命館文学』⁴2・4・4・2・5・4・2・6号 立命館大学人文学会 昭和
5・5・1)

秋山公男 「『行人』の深層心理

(『立命館文学』³3・9・4・4・1号 立命館大学人文学会 昭和
5・7・3)

藤沢るり 「『行人』論・言葉の変容―」

(『国語と国文学』⁵9―10号 東京大学国語国文学会 昭和
5・7・1)

佐々木勝 「『行人』について―一郎・二郎・直の関係をめぐって―」

(『青山語文』¹4号 青山学院大学日本文学会 昭和
5・9・3)

文哲秀 「『行人』研究―一郎Ⅱ苦悩―」

(『日本学報』¹5号 大阪大学文学部日本学研究室 昭和
6・0・1)

井上公雄 「『行人』論―「塵勞」章の意味するものその考察の前提―」

(『キリスト教文芸』⁴号 「日本キリスト教文学会関西支部」 昭和
6・1・1)

米田利昭 「『行人』を読む」

(『日本文学』³6巻9号 日本文学協会 昭和
6・2・9)

井上公雄 「『行人』論―「塵勞」章の意味するもの(二)―」

(『キリスト教文芸』⁵号 「日本キリスト教文学会関西支部」 昭和
6・2・1)

三谷憲正 「『行人』の絵模様―「三沢」と「一郎」、そして「娘さん」と「お直」―

(『稿本近代文学』¹0号 筑波大学文芸言語学系平岡研究室 昭和
6・2・1)

須田喜代次 「『行人』論(1)―新時代と「長野家」―」

- （「大妻国文」² 0号 大妻女子大学国文学会 平成元年・3）
- 須田喜代次 「『行人』論（2）——「男の道徳」「女の道徳」」
（「大妻女子大学文学部紀要」² 1号 大妻女子大学 平成元年・3）
- 飯田祐子 「〈長野家〉の中心としての『母』——『行人』論のために」
（「名古屋近代文学研究」7号 名古屋近代文学研究会 平成元年・¹2）
- 工藤京子 「『行人』試論——一郎をめぐって」
（「目白近代文学」9号 日本女子大学大学院文学研究会 平成2・5）
- 小森陽一 「交通する人々——メディア小説としての『行人』」
（「日本の文学」8号 有精堂 平成2・¹2）
- 大竹雅則 「『行人』——一郎と直」
（「論究」¹ 1号 帝京大学文学部国文学科 平成3・2）
- 榎林滉ニ 「『行人』の構造——二つの時間」
（「文教国文学」³ 0号 広島文教女子大学国文学会 平成5・7）
- 稲垣政行 「『行人』論——一郎の発見、そして一郎の求めた世界へ」
（「日本語と日本文学」¹ 9号 筑波大学国語国文学会 平成5・¹0）
- 平岡敏夫 「火鉢の両側に手を翳す——漱石作品のイメージ・「門」「行人」より」
（「群馬県立女子大学国文学研究」¹ 6号 群馬県立女子大学国語国文学会 平成8・3）
- 木村功 「『行人』論——一郎・お直の形象と二郎の〈語り〉について」
（「国語と国文学」⁷ 4—2号 東京大学国語国文学会 平成9・2）
- 中山和子 「『行人』論——家族の解体から浮上するもの」
（「漱石研究」9号 翰林書房 平成9・¹1）
- 仲秀和 「『行人』論——「謎」・「転移」・「一郎の内部世界」」
（「文化研究」¹ 4号 樟蔭女子短期大学 平成¹2・6）
- 好川佐苗 「『行人』論——その語りの力学」
（「キリスト教文学」¹ 9号 日本キリスト教文学会九州支部 平成¹2・7）
- 吳敬 「漱石文学における家族関係——兄弟関係を中心として」

- （「文芸と批評」9巻2号 文芸と批評同人 平成12・11）
- 岡村あいこ 「夏目漱石『行人』論——一郎の存在の曖昧さについて」
- （「広島女学院大学国語国文学誌」30号 広島女学院大学日本文学会 平成12・11）
- 佐々木亜紀子 『『行人』の「女景清の逸話」——「前世紀の肉声」が聴こえる場所』
- （「社会文学」18号 日本社会文学会 平成15・11）
- 吉川仁子 「『行人』論——「あの女」のゆくえ」
- （「叙説」1号 奈良女子大学国語国文学 平成15・11）
- 上総朋子 「夏目漱石『行人』論——「人から人へ掛け渡す橋」の可能性」
- （「日本文芸学」1号 日本文芸学会 平成17・21）
- 上総朋子 「夏目漱石『行人』論——「死」へ「狂」へ「宗教」そして「救済」をめぐる」
- （「キリスト教文芸」1号 「日本キリスト教文学会関西支部」 平成17・31）